

記録集

みなとまち  
新潟の  
芸と風土  
— 発掘・体験プロジェクト  
— 近世から現代まで

景真之湊

渡 佐

記録集

みなとまち  
新潟の  
芸と風土  
発掘・体験プロジェクト  
— 近世から現代まで

應需而馮文呂  
東鐘軒梓





新潟湊之真景(部分) 井上文昌 安政6(1859) 新潟市歴史博物館蔵

## はじめに

本冊子は、文化庁の令和5年度文化芸術振興費補助金 Innovate MUSEUM事業に採択されて行われた「みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト-近世から現代まで」の活動記録です。本事業は、新潟市の旭町・西大畑地区や、隣接する古町地区、下町地区の美術館や博物館をはじめとする文化施設、飲食店、寺院などと連携しながら集めた芸術作品を展示・公開し、未来への継承について思考するきっかけとなることを目指しました。

新潟市の近世からの商家や旧家には書画・工芸品等の作品が保存されてきました。このプロジェクトでは、この地域に眠るこれらの作品を市民からお借りするなどして9会場にて展示を行ったとともに、新潟大学旭町学術資料展示館では、新潟大学において日本美術史を研究した故武田光一氏の業績の資料を展示し紹介しました。また、現代に続くこの地域の芸能や街づくりにまで対象を広げてのシンポジウム、市民を対象とした体験講座やコンサート、まち歩きを实践しながら新潟に残るみなとまちの文化芸能の意義を伝えました。これらに加え作品を撮影してアーカイブし、今後の研究にもつながるようデータを連携機関と共有しました。そして最後に市民からアンケートを募り事業を相対化しました。この取り組みが次に繋がることを大いに期待するところです。

末筆となりましたが、本事業に賛同し実行委員に参画して頂いた皆さまをはじめ、ご協力頂いた皆さまに心より感謝申し上げます。

## みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト の開催にあたって

ここ新潟市は、信濃川と阿賀野川の河口に築かれた湊町として発展してきました。特に北前船の寄港地、幕末開港5港の一つとして廻船問屋等が立ち並び、古町の花街文化あるいは漆芸をはじめとする伝統工芸など新潟固有の芸術文化が育まれてきました。また、人が集うことにより新潟の食文化にも光があたりました。

新潟大学旭町学術資料展示館が位置している旭町地区と、隣接する西大畑、古町、下町地区には、本プロジェクトにて展示会場となっている砂丘館、旧齋藤家別邸、北方文化博物館新潟分館、旧小澤家住宅、正福寺、そして新潟市歴史博物館が存在しており、それぞれ新潟の昔の姿を現代に伝える建築物が残り、市民の憩いの空間ともなっています。同じく展示会場である行形亭、加島屋は新潟の食文化を支えるとともに文化芸術の交わる場として今も市民に愛されています。

今回、「みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト」として、これらの施設が所蔵している芸術作品や古道具、さらには市民が所有している近代の屏風、掛け軸、工芸品など、また新潟大学における美術研究の成果を公開することになりました。みなとまち新潟の文化が残る町並みを巡りながら、これらの作品を当時の雰囲気が漂う趣のある空間にて鑑賞していただくことで「地域全体がそのままミュージアム」となることは、本プロジェクトの大きな目的でもあります。

本プロジェクトは、新潟市をはじめ、新潟市内の文化施設、寺院、飲食店、また出品いただいた所蔵者の皆様など、多くの方々のご協力とご厚意により実現しました。関係各位の皆様には深く感謝を申し上げます。

みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト実行委員会

会長 丹治 嘉彦

（新潟大学旭町学術資料展示館 館長）  
新潟大学教育学部 教授

## 学長挨拶

2024年は新潟大学が創立されてから75周年の節目の年に当たります。この75年の歩みの中で、新潟大学における研究や教育は、地域に対して多方面に事績を残してきました。今回「みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト」を通じてその成果をご覧いただくことは、新潟大学が地域や社会の「知の拠点」として機能していることの現れです。

本プロジェクトの開催にあたり、地域の芸術作品のほかに、新潟大学における研究・教育の成果としての文献資料、あるいは収集した作品などご鑑賞いただけます。これらは日頃は、学外の方々のお目に触れることはほとんどありませんが、こうした大学の知としての学術的財産を広く公開することは、現代の大学が社会に向けて開かれていることを示すものでもあります。大学にとって論文や専門書だけが成果発表の場ではなく、今回のような形で社会に還元することも現代の大学の役割ですし、社会が求める新たな大学の姿でもあるでしょう。新潟大学旭町学術資料展示館はそのような使命を持ち合わせています。

新潟大学は、本プロジェクトで培った地域との協働をもとに、今後も新たな取り組みを行ってまいります。皆様方には、一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

国立大学法人新潟大学

学長 牛木 辰男



みなとまち  
新潟の  
芸と風土  
発掘・体験プロジェクト  
— 近世から現代まで



目次

はじめに ..... 3

ごあいさつ ..... 4

作品展示 ..... 6

各展示会場の紹介 ..... 12

プロジェクト展示品リスト ..... 26

論考 ..... 31

丹治 嘉彦 ..... 32

大倉 宏 ..... 34

大森 慎子 ..... 36

田中 咲子 ..... 40

久保 有朋 ..... 42

関連イベント ..... 45

体験講座レポート ..... 46

シンポジウムレポート ..... 48

コンサートレポート ..... 52

まち歩き ..... 54

感想・その他資料 ..... 57

来館者・参加者の感想 ..... 58

鑑賞者インタビュー ..... 60

アンケート結果 ..... 64

掲載記事 ..... 67

広報・デザイン ..... 68

展示および関連イベント会場略地図



詩画押絵貼交屏風(右隻) 五十嵐俊明 1760年代 個人蔵



梅雉子図 狩野栄川古信 制作年不詳 個人蔵



和船模型 作者不明 制作年不詳 個人蔵  
(本作品は会期中に展示していません)

# 新潟大学旭町学術資料展示館

新潟市中央区旭町通2-746

<https://www.lib.niigata-u.ac.jp/tenjikan/>



新潟大学で所蔵する標本類・考古資料・歴史的実験機器などを常設展示するほか、企画展を開催しています。昭和4(1929)年に新潟師範学校記念館として建てられた建物は国の登録有形文化財です。

## 展示概要

近世の新潟には豊かな文化が花開き、文化人の往来も盛んでした。新潟へ赴いた絵師、工人もいれば、書画などの文物も新潟にもたらされました。逆に新潟で生まれ、江戸や京で活躍した者もいました。五十嵐俊明はその代表で、彼は後年帰郷して、後進の育成にもあたりました。こうした新潟の文化史は、地道な研究を通じて近年漸く明らかになりつつあります。

本会場では、近世新潟絵画の研究に携わった故新潟大学名誉教授武田光一氏の研究とともに、この地の芸術に関する新潟大学の研究の一端をご紹介します。



詩画押絵貼交屏風 五十嵐俊明 1760年代 個人蔵



貼交屏風 個人蔵



若きカフカス人(レプリカ) 中原悌二郎 大正8(1919) 新潟大学蔵



# 砂丘館

新潟市中央区西大畑町5218-1

<https://www.sakyukan.jp>



昭和8(1933)年に日本銀行新潟支店長の「役宅」として建てられた近代和風住宅と日本庭園が建設当初の姿のまま、芸術・文化の施設に生まれ変わりました。応接室や和室でコーヒーも楽しめます。

## 展示概要

間瀬屋(S家)は江戸時代半ばに間瀬(新潟市西蒲区)から新潟町に移り廻船問屋を営みます。明治には船具商に転身し北洋漁業にも進出。戦後は船舶塗料つなかりでペンキ、ワックスを商い、鉄筋コンクリート造のビルの急増する中、株式会社新潟ビルサービスを創立しました。

本会場では、同家の所蔵品から新潟の近世を代表する絵師五十嵐俊明の屏風絵、佐渡の佐々木象堂の鑄金作品、江戸時代中期の絵師狩野栄川古信の絵を展示しました。



造船・諸葛亮乗船図 五十嵐俊明 制作年不詳 個人蔵



梅雉子図 狩野栄川古信 制作年不詳 個人蔵



鳳凰金銅置物 佐々木象堂 昭和4(1929) 個人蔵

# 旧齋藤家別邸

新潟市中央区西大畑町576

<https://saitouke.jp>



湊町新潟の豪商・齋藤家が大正期に建てた迎賓館。砂丘の斜面を生かした回遊式庭園を座敷から眺めることができます。住宅街の中で深山に分け入ったかのような気分を味わえます。国指定名勝。

## 展示概要

上大川前通には、江戸時代から海産物商を営んできた商家T家があります。明治期には鮭・鱒などの買い付けの足を樺太にまで延ばし、漁場経営も行うなど新潟の北洋漁業家として最も成功し財を成しました。

本会場ではかつて所有していた西洋型帆船にちなみ、船を主題として、この商家の華やかなもてなしの場を彩ってきた資料をご紹介します。



宝船蒔絵硯箱 作者不明 昭和初期 個人蔵



山水図屏風 立原杏所 制作年不詳 個人蔵



色絵梅牡丹図花生 有田・深川製磁 昭和15(1940)頃 個人蔵



「ひがし丸」写真パネル 個人蔵

# 行形亭

新潟市中央区西大畑町573  
<https://www.ikinariya.co.jp>



江戸時代中期、元禄の頃に創業した老舗料亭。松林の中で茶店として始まり、現在の日本料理店の形態になったのは江戸後期頃と伝えられています。門を含む10カ所が国の登録有形文化財です。

## 展示概要

会場の喫茶にて展示されている萬代橋の写真は三代目のもの。昭和4(1929)年に架け替えられ、現在も市民にとって重要なシンボルとなっています。また、磁石式電話機は明治期から普及しはじめた電話機で、新潟市においてはとても珍しかったようです。これらの写真や道具から当時に想いを馳せていただきました。



磁石式電話機 昭和初期 行形亭蔵



萬代橋写真 明治～昭和 行形亭蔵

# 北方文化博物館 新潟分館

新潟市中央区南浜通2-562  
<https://hoppou-bunka.com/niigatabranch/index.html>



北方文化博物館の分館。油田採掘で知られる清水常作氏が明治28(1895)年に別荘として建設したものを大正初期に地主伊藤家が別邸として購入し、ほどなく分家の住まいに。戦後、新潟市郊外の本邸(北方文化博物館)とともに博物館として公開。昭和3(1928)年増築の洋館には、郷里に戻り「夕刊ニイガタ」社長を務めた會津八一も暮らしました。

## 展示概要

本会場では、江戸時代後期に寺泊に生まれ、新潟本覚寺住職、池上本門寺貫主を務めた小林日昇の「山水図」を座敷に掛けました。會津八一の箱書きが残ります。



山水図 小林日昇 明治18(1885)  
 北方文化博物館蔵

# 正福寺

新潟市中央区西堀通7番町1548



浄土真宗寺院(大谷派)。明治時代には施蘭薬院が開設され、新潟で最初の西洋医療が行われました。幕末・明治期の絵師本間翠峰や、歌人であった松本潤志女(江戸時代)、日野資徳(明治時代)らの墓があります。

## 展示概要

本会場では、五十嵐浚明、浚明の孫である五十嵐竹沙と佐野北汀、本間翠峰など、新潟に縁のある絵師の屏風や掛軸などを展示しました。



人物山水図屏風 五十嵐竹沙 佐野北汀 寛政8(1796) 正福寺蔵  
花鳥図屏風 五十嵐浚明 安永元(1772) 正福寺蔵



雪景色掛軸 本間翠峰 明治6(1873) 正福寺蔵

# 加島屋

新潟市中央区東堀前通8番町1367

<https://www.kashimaya.jp>



信濃川・阿賀野川でとれる鮭・鱒等の塩干物店として安政2(1855)年に創業。昔ながらの手作りの味を大切に、素材を厳選し、新潟の風土や食文化から生まれ、継がれてきた郷土の味を作り続ける新潟を代表する老舗。

## 展示概要

創業以来伝統の味を守り継いできた加島屋の顔というべき看板を揮毫したのが、新潟を代表する書家のひとり江川蒼竹(1917-2008)です。本店リニューアルオープンも記念し、その江川蒼竹の作品を展示しました。大正時代に新潟で生まれ、昭和から平成にかけて活躍した作家が受け継ぐ新潟の文化を感じていただきました。



山長水遠 龍飛鳳舞 慈 仁者楽山 江川蒼竹 昭和～平成前期 株式会社加島屋蔵



# 旧小澤家住宅

新潟市中央区上大川前通12-2733

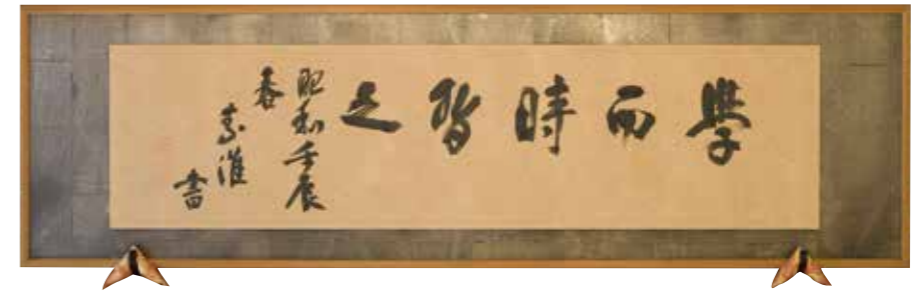
<https://www.nchm.jp/ozawake/>



旧小澤家住宅は、江戸時代後期から新潟町で活躍していた商家・小澤家の店舗兼住宅です。母屋、土蔵等が残っており、その中でも主屋はその直後に再建されたと推測されており、旧新潟町域に現存する町家としては最も古い建物の一つです。

## 展示概要

主屋にて扁額3点、梁川星巖書「公直無私」、池田勇人書「老成之友」、吉田茂書「学而時習之」などを、本企画展の関連展示としてご覧いただきました。



学而時習之 吉田茂 昭和7(1932) 旧小澤家住宅蔵



老成之友 池田勇人 昭和中期 旧小澤家住宅蔵



公直無私 梁川星巖 江戸後期～幕末 旧小澤家住宅蔵



南蛮図屏風(左隻) 作者不明 制作年不詳 個人蔵

# 新潟市歴史博物館(みなとぴあ)

新潟市中央区柳島町2-10  
<https://www.nchm.jp>



信濃川のほとり、明治初め開港当初の姿を残す旧新潟税関庁舎(国指定重要文化財)の地に建ち、いにしへの湊町新潟の歴史・文化に触れることができます。かつての風情を再現した敷地では、対岸の現在の港(西港)もお楽しみいただけます。

## 展示概要

本会場の関連展示は、新潟の旧家所蔵の屏風など6点、エントランス1点、企画展示室2点、常設展示室3点です。また、常設展示室では、湊町新潟の歴史も併せて紹介しました。



武蔵野 横尾深林人 昭和前期 個人蔵



雀図 行田魁庵 幕末 新潟市歴史博物館蔵



旧新潟税関庁舎 明治2(1869) 重要文化財



旧第四銀行住吉町支店 昭和2(1927) 登録有形文化財



花鳥図屏風 江村春暉 1800年代 新潟市歴史博物館蔵



龍図(龍虎図屏風右隻) 行田魁庵 弘化4(1847) 新潟市歴史博物館蔵



遊戯図屏風 江村春暉 江戸後期 新潟市歴史博物館蔵

# プロジェクト展示品リスト

## 新潟大学旭町学術資料展示館 10月25日(水)～11月26日(日)

資料名	作者	年代	サイズ(cm)	材質	員数	所蔵者
貼交屏風	宇田天皇867-97/菅井梅閑1784-844/五十嵐凌明1700-81/狩野探幽1602-74/土佐又平(光起)1617-91/王文治1730-1802/平田篤胤1776-1843/谷文晁1736-1840/菊池五山1769-1849/狩野常信1636-1713他		159.0×78.0×2	紙本・絹本/墨書・墨画・淡彩・着色	二曲一隻	個人蔵
『音の民俗学：越後と佐渡の祭りを聴く』	伊野義博	2000			一冊	新潟大学
『新潟(うた)の文化誌：人は何故うたうか：越後に響くうたの原風景』	伊野義博	2013			一冊	個人蔵
『音楽教育学の未来：日本音楽教育学会設立40周年記念論文集』	日本音楽教育学会編	2009			一冊	新潟大学
『うちのDEアート15年の軌跡：地域アートプロジェクトを通じて見えてきたもの』	新潟大学教育学部 芸術環境講座(美術)編	2017			一冊	個人蔵
『うちのDEアート概要集』(抜粋：2001, 2005, 2007, 2011, 2016年)	新潟大学教育学部 芸術環境講座(美術)編	2001～2016			五冊	個人蔵
『新潟県文人研究 第25号 グラビア特集 文人作と現代書』	新潟大学大学院現代社会文化研究科 越佐文人研究会編	2022			一冊	個人蔵
『相馬御風遺墨集』	相馬御風遺墨集刊行委員会編	2010			一冊	個人蔵
『亀田鵬齋総集』	岡村浩編、小千谷市 亀田鵬齋展実行委員会	2007			一冊	個人蔵
若きカフカス人(レプリカ)	中原悌二郎 1888-1921	大正8 (1919)	H42.2	ブロンズ	一鉢	新潟大学
『にいがた美術散歩』	久保尋二、小町屋朝生	1977			一冊	新潟大学
『新潟県美術名鑑』	新潟日報社編	1995			一冊	新潟大学
『美の樹海から』	久保尋二	1996			一冊	新潟大学
『レオナルド・ダ・ヴィンチ研究：その美術家像』	久保尋二	1972			一冊	新潟大学
『マドリッド手稿』	レオナルド・ダ・ヴィンチ著 久保尋二他翻訳	1975			一冊	新潟大学
少年時代のノート	武田光一	1958 不詳	A5		二冊	個人蔵
久保尋二教授による武田光一の教授推薦書(コピー)	久保尋二	1990			二枚	個人蔵
武田光一著書・論文『日本の南画』『池大雅』他	武田光一				九冊	個人蔵
資料調査写真と愛用のカメラ	(武田光一)		W15.0×D13.0 H11.0(カメラ)		一台	個人蔵
『五十嵐凌明』展巻頭論文原稿(コピー)	武田光一	2020	A4横		二十五枚	個人蔵
『没後320年記念特別展五十嵐凌明：越後絵画のあけぼの』展図録	新潟市歴史博物館発行	2020	A4横 264p		一冊	個人蔵
令和三年度國華賞展覧会図録賞表彰状	國華賞運営委員会	2020			一枚	個人蔵

第33回国華賞贈呈式パンフレット(展覧会図録賞選評 成澤勝嗣)	國華社 朝日新聞社	2021	B5縦 12p			一冊	個人蔵
新潟日報2020年11月26日11面(部分)展覧会へようこそ「五十嵐凌明」展	武田光一	2020	25.9×19.0			一紙	個人蔵
献花	山本真也 1946-	令和3 (2021)	28.5×20.0	紙本着色		一面	個人蔵
「うちのDEアート2003」事業報告書 山本真也「新潟大学蔵 曾我二直庵作《鷲鷹図屏風》の現状模写及び表装修理について」	山本真也 新潟大学教育学部芸術環境講座発行	2003	A5縦 56p			一冊	個人蔵
鯛賀(大雅)先生観画図	山本真也 1946-	平成19 (2007)	90.0×45.0	紙本墨画淡彩		一面	個人蔵
鷲鷹図屏風	曾我二直庵 生没年不詳	江戸初期	138.5×59.3 ×2	紙本墨画		二曲一隻	新潟大学
試験問題、東洋美術史レポート課題、スケジュール	武田光一	1989、他				三枚	個人蔵
唐詩画譜(八種画譜)【復刻】のうち1冊	黄鳳池輯		32.4×22.2	紙・印刷		一冊	新潟大学
愛用のスライド映写機	理科学精機		W19.0×D32.0 H23.0			一台	新潟大学
虎子図(双幅《虎図》の内)	白井華陽 ?-1836	制作年不詳	102.0×36.4	絹本墨画淡彩		一幅	個人蔵
龍図(双幅《龍虎図》の内)	森蘭齋 1740-1801	制作年不詳	106.5×39.4	絹本墨画淡彩		一幅	個人蔵
秋景山水図	釧雲泉 1759-1811	文化5 (1808)	129.0×56.7	絹本墨画淡彩		一幅	個人蔵
花鳥図(白木蓮・木瓜に鶺鴒)	五十嵐竹沙 1774-1844	制作年不詳	97.0×32.4	絹本着色		一幅	個人蔵
大黒天(収穫)図	五十嵐凌明 1700-1781	明和7 (1770)	97.5×34.7	絹本墨画淡彩		一幅	個人蔵
龍図(双幅《龍虎図》の内)	五十嵐凌明 1700-1781	安永2 (1773)	98.0×35.2	絹本墨画		一幅	個人蔵
詩画押絵貼交屏風	五十嵐凌明 1700-1781	1760年代	123.3×47.5 ×12	絹本墨画		六曲一双	個人蔵

## 砂丘館 10月25日(水)～11月26日(日)

資料名	作者	年代	サイズ(cm)	材質	員数	所蔵者
造船・諸葛亮乗船図	五十嵐凌明 1700-1781	制作年不詳	各159.0×334.0	紙本墨画淡彩	六曲一双	個人蔵
梅雉子図	狩野栄川古信 1696-1731	制作年不詳	101.4×40.9	絹本着色	一幅	個人蔵
鳳凰金銅置物	佐々木象堂 1882-1961	昭和4 (1929)	W24.0×H37.0	金銅	一鉢	個人蔵

**旧齋藤家別邸** 10月25日(水)～11月26日(日)

資料名	作者	年代	サイズ(cm)	材質	員数	所蔵者
山水図屏風	立原杏所 1786-1840	制作年不詳	133.0×51.4 ×6	紙本墨画	六曲一隻	個人蔵
秋草図風炉先屏風	作者不明	制作年不詳	46.5×62.0	紙本墨画	二曲一隻	個人蔵
入船図風炉先屏風	作者不明	制作年不詳	60.0×85.0	紙本墨画	二曲一隻	個人蔵
宝船蒔絵硯箱	作者不明	昭和初期	W22.4×D20.2 ×H2.5	木製漆塗	一合	個人蔵
色絵梅牡丹図花生	有田・深川製磁	昭和15 (1940)頃	直径(最大): 25.5 H31.0	磁器	一口	個人蔵
「ひがし丸」写真パネル					一枚	個人蔵

**行形亭** 10月25日(水)～11月26日(日)

資料名	作者	年代	サイズ(cm)	材質	員数	所蔵者
萬代橋写真		明治～昭和				株式会社 行形亭
人力車		明治～ 昭和初期			一台	
磁石式電話機		昭和初期				

**北方文化博物館 新潟分館** 10月25日(水)～11月26日(日) 11/4は茶会貸出のため観覧不可

資料名	作者	年代	サイズ(cm)	材質	員数	所蔵者
山水図	小林日昇 1832-1891	明治18 (1885)	133.0×36.0	紙本墨画淡彩	一幅	北方文化 博物館

**正福寺** 11月14日(火)～11月19日(日) 10:00～16:00

資料名	作者	年代	サイズ(cm)	材質	員数	所蔵者
花鳥図屏風	五十嵐浚明 1700-1781	安永元 (1772)	各159.0× 348.0	紙本着色	六曲一双	正福寺
人物山水図屏風	五十嵐竹沙1774-1844 佐野北汀1775-没年不明	寛政8 (1796)	各137.0× 51.1(1.6扇) 53.8(2.5扇)	紙本墨画淡彩	六曲一双	
酒器	輪島塗	制作年不詳			二本	
高付	輪島塗	制作年不詳			一口	
雪景色掛軸	本間翠峰 1841-1877	明治6 (1873)			一幅	
着彩香炉	清風与平	制作年不詳			一合	
金火鉢	作者不明	制作年不詳			一本	
桐火鉢	作者不明	制作年不詳			五本	
銅島緞通	作者不明	制作年不詳			二枚	
生花	日新流 藤田美知新					

**加島屋** 10月25日(水)～11月26日(日) 11/5・11/12は閉店

資料名	作者	年代	サイズ(cm)	材質	員数	所蔵者
仁者楽山	江川蒼竹 1917-2008	平成13 (2001)	135.0×35.6	紙本墨書	一幅	株式会社 加島屋
龍飛鳳舞	江川蒼竹 1917-2008	制作年不詳	各150.0×140.0	紙本墨書	二曲一双	
慈	江川蒼竹 1917-2008	制作年不詳	80.6×84.3	木本墨書	一面	
山長水遠	江川蒼竹 1917-2008	平成13 (2001)	139.2×33.9	紙本墨書	一幅	

**旧小澤家住宅** 10月25日(水)～11月26日(日)

資料名	作者	年代	サイズ(cm)	材質	員数	所蔵者
公直無私	梁川星巖 1789-1858	江戸後期 ～幕末	68.5×177.4	紙本墨書	一面	旧小澤家 住宅
老成之友	池田勇人 1899-1965	昭和中期	51.0×160.0	紙本墨書	一面	
学而時習之	吉田茂 1878-1967	昭和7 (1932)	58.3×163.3	紙本墨書	一面	
南蛮図屏風	作者不明	制作年不詳	各174.3× 59.6(1.6扇) 57.5(2.5扇)	紙本着色	六曲一双	個人蔵

**新潟市歴史博物館（みなとぴあ）** 10月25日(水)～11月26日(日)

資料名	作者	年代	サイズ(cm)	材質	員数	所蔵者
武蔵野	横尾深林人 1898-1979	昭和前期	169.6×170.4	紙本着色	二曲一隻	個人蔵
花鳥図屏風	江村春暉 1801-1880	1800年代	132.7× 48.5(1.6扇) 51.0(2.5扇)	紙本着色	六曲一隻	新潟市 歴史博物館
龍図(龍虎図屏風右隻)	行田魁庵 1812-1874	弘化4 (1847)	174.5×346.0	紙本墨画	六曲一隻	
雀図	行田魁庵 1812-1874	幕末	22.5×18.7	紙本淡彩	一枚	
臨画図巻	芳明 生没年不詳	享和2 (1802)	28.0×1205.6	紙本墨画	一卷	
遊戯図屏風	江村春暉 1801-1880	江戸後期	76.2×343.6	紙本着色	八曲一隻	





精栗秋草蒔絵納戸硯 作者不明 制作年不詳 個人蔵  
(本作品は会期中に展示していません)

# 論考

## 市民との架け橋として

### 丹治 嘉彦

新潟大学旭町学術資料展示館 館長  
新潟大学教育学部 教授

新潟は日本一の長さを誇る信濃川とそれに次ぐ水量の阿賀野川が注ぎ込み、肥沃な土地が形成されたことにより、古くは港町としてまた田園地帯として発展してきた。特に北前船の寄港地、幕末開港5港の一つとして廻船問屋等が立ち並び、古町の花街文化あるいは漆芸をはじめとする伝統工芸など新潟固有の芸術文化が育まれてきた。また、多くの人が集ったことで、食事をする場が生まれ新潟の食文化にも光があたった。

新潟大学旭町学術資料展示館が位置している旭町地区、隣接する西大畑、古町、下町地区には、本プロジェクトにて展示会場となっている砂丘館、旧齋藤家別邸、北方文化博物館新潟分館、旧小澤家住宅、正福寺そして新潟市歴史博物館などが存在しており、それぞれ新潟の昔の姿を現代に伝える建築物が残り、市民の憩いの空間ともなっている。同じく展示会場である行形亭、加島屋は新潟の食文化を支えるとともに文化芸術の交わる場として今も市民に愛されている。

今回「みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト－近世から現代まで」における事業の内容として、作品が展示された施設が所蔵している芸術作品、あるいは市民が所有している近代の屏風や掛け軸といった作品、さらには、新潟大学における芸術研究の成果を新潟大学旭町学術資料展示館はじめ各施設にての公開が行われた。それに加え、事業を市民に幅広く知ってもらうためのワークショップやコンサートそしてシンポジウムを実施し、新潟シティガイドと連携して各施設を巡るまち歩きを行った。

一般的に芸術作品を鑑賞するのは美術館や博物館などが挙げられる。それらは作品の管理・保管においても万全の体制がとれていること、そしてそれぞれを訪れる際に適切なサポート体制がとられているのが大きな特徴と言えるだろう。今回の事業において新潟大学旭町学術資料展示館、新潟市歴史博物館を除く施設においては、美術館や博物館のように作品展示・公開に関して万全な態勢で臨めたわけではなかった。限られた時間の中での展示・公開であったとはいえ、屏風や掛け軸の展示・公開は不特定多数の来場者が訪れることにより、保全面や環境面からそれぞれ適切な場とは言い難い環境だった。だが、展示会場となった正福寺をはじめいくつかの施設において畳敷きの部屋や床の間に作品を飾ることは、鑑賞者にとってとても馴染み深い設えとなった。もともと屏風や軸物はこのような空間において絵画装飾の一つとして発展し、日本家屋における畳の間では冠婚葬祭や季節の祝宴などが行われた際、催事に相応しい作品を飾り非日常的な空間を演出してきた。軸物は巻いて保管することが可能となり、屏風においては室内に入る風を防いだり人の視線を妨げる機能も備わる中、日常生活に密接した展示となったことは間違いない。

これら掛け軸や屏風を市民からお借りして展示することは事業の中で大きな柱としたが、

何処にどのような作品があるのか、またどのようにしたら辿りつけるのか…先ずはこの分野について知見を有している方や市民から情報の提供をお願いすることにした。その後、新潟大学旭町学術資料展示館友の会の方をはじめ市民より作品を所有している家々から情報が寄せられ、それを頼りに訪問を行っていくつかの作品を拝見することが出来た。挨拶をさせてもらった後にどのような経緯で作品を取得されたのか等を尋ねると、不明なところが多く答えられないとのことだったが、昭和の新潟の暮らしや営みについての話をいくつか聞くことが出来たのは大きな収穫だった。掛け軸等を所蔵されていた方からは、戦前自邸で冠婚葬祭が行われていた際金屏風を立て祝いの場を設え、正月の飾りとして貼交屏風や鶴の屏風が使われていたと伺った。また、当時その家では子どもが多かったことから一人一人に乳母がついており、その募集は信濃川の土手に立って女中が「乳母や～」と叫ぶと路地から路地にかけて家々の中から乳が良く出そうな娘を乳母として雇ったとのこと。お話を伺った方は、偶然にも新潟の旧家であったと後から伺い知ることになった。

新潟にはこのような旧家(旧家とは主に地主と商家、また代々の家を指す)が多数軒を並べており、例えば北前船に大きい屏風や掛け軸が積まれ新潟から輸出されまた輸入され、主に広い座敷を持つ旧家がいずれをもとめ調度品や部屋の設えなどとして所有していた。また、大正から昭和10年ごろにかけて寺や割烹を会場として旧家への書画骨董品の売り立てが数多く行われ、多くの作品が新潟の旧家に所蔵されるようになったとのことである。このような話は新潟において湊町文化が発展してきた証とも言える。

本プロジェクトで展示する作品を借り受けるため所有者宅を訪ねると、自宅の物置や蔵にそれらを所蔵されており、夏の暑い時間帯であったため、中に入ると汗が吹き出るほどの劣悪な環境のもと日常品等と一緒に保管されていた。これらは健全な形で作品保護・保管がされているとは決して言えない(借り受けた屏風の一部は虫に喰われた状態であったことから展示に至るまで燻蒸作業を行った)。それらを回避するためには、先ずは湿度や温度が一定に保たれている博物館、美術館の収蔵庫のような空間に作品を取めることが理想とされる。

これらは市民が所有していることから私の財産となり、作品の維持管理について責任をもつことが求められる。しかしながら、所有者が諸事情でこれが出来なくなった場合どのように対応したら良いのかが今後問われてくる。仮にこの問題が私的な所有でなく公共的なものであれば支援等が受け易くなるが、全てを公に委ねることに対しては財政的支援やそれを受けける施設等にも限度があり難しいことから、問題の解決には至らないだろう。作品を維持管理として個人が所有し続けることを優先させるのか、あるいは公共的な援助を公に委ねるのかと言った二項対立にするのではなく、文化を次の時代に繋げることとして、先ずはそこに横たわる思いや願いと言ったものを相互にやり取りする環境を形成することが求められる。例えば、様々な人々とは気兼ねなく交錯する場を皆で作り上げ、そこで議論を交わすことによってこの問題に対する解が得られるとも考える。いわゆる芸術と市民を繋げるプラットフォームの構築である。それは芸術が額縁におさめられた絵画作品や台座に乗った彫刻作品といった固定的な範囲で考察するのではなく、音楽、踊り、そして食に至るまで、それぞれが豊かな文化の証としてこの土地に築かれてきたことを理解共有し、ここで生まれた新たなこの文化を豊かな系譜として、ここで暮らす人と一緒に知恵を絞り次の時代に継承していくことに値する。「みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト－近世から現代まで」はこの道標となったと言える。

今回新たに調査した作品の一例



宝船図 行田魁庵



書屏風 巖谷一六



和船模型

## 越後絵画史へようこそ

### 大倉 宏

砂丘館 館長  
認定NPO法人 新潟絵屋 理事長

「越後絵画史」という用語は、響きが大仰であるし、一般的にはあまり熟していないと思われる。しかし実はごく少数の人々にとっては、以前から熱く語られ、その調査研究も地道に積み重ねられてきた、馴染みのテーマであった。

武田光一「五十嵐俊明に始まる『越後絵画史』」(「生誕320年記念特別展 五十嵐俊明展」図録所収)より

本展の内容について、2022年に丹治嘉彦さんから相談を受けたとき、新潟大学で日本美術を長く教えた武田光一さんを軸に構想してはどうかと提案した。

武田さんの講義を直に受けたことはなかったけれど、一般にも公開された退官前の最終講義は聞きに行き、そこで尾形光琳の「紅梅白梅図屏風」のベースに、雪村周継の「欠伸布袋・紅白梅図」があるのではないかという、おどろくべき指摘を聞いた。言われて見ると、両者の形、構図の類似は一目瞭然だが、2枚から受ける絵のイメージや印象は大きく違い、描かれた時代も違う。武田さんのご専門は近世の南画で、光琳も雪村も、その専門分野からは周辺存在だ。それらへの目配りは美術史家として当然のことだったかも知れないが、そんな遠い絵同士の共通点に気づき、大胆な発見ができたのは、武田さん自身からより絵をよく、愉しんで、じっくり「見る」人だったからだろう。

専門の枠内に限らず絵を見るのが好きなご様子は、私が運営に関わる新潟絵屋や砂丘館の展示を見に、よく来られたことから受けた印象だった。現代の美術へも興味を向ける幅広い興味、関心に感銘を受けた。新潟絵屋ではその武田さんに、日本の絵画について3回の講座をお願いしたことがあった。パソコンの時代になっていたが、持参されたのはリバーサルフィルムを一枚ずつ入れ替えて映写する、時代物のデュアル型スライド映写機だった。写真には退色したものもあったが、図版からの複製ではなく、すべてご自身が撮影された写真とのこと。自分で見、撮ったもので語るという徹底した姿勢にも、美術に対する真正な姿勢が伺えた。

2017～8年頃であったか、新潟のある人から、所蔵する矢島群芳という近世群馬の絵師の絵を見せられ、とてもいい作品だったので武田さんに見ていただいた。武田さんも紹介する価値を認められて、2020年7月に新潟大学旭町学術資料展示館での群芳展が実現したが、その時武田さんはすでに体調を崩され、当時住まわれていた神奈川から見に来ることができなかった。さらに同年11月～12月に新潟市歴史博物館みなとびあで開催された「生誕320年 五十嵐俊明展」は武田さんが監修された、近世新潟で活躍した絵師の全貌を紹介

する画期的な企画展だった。武田さんの研究対象だった池大雅の現在知られる最初期の作品は、京都にいた俊明が新潟に帰る時、大雅が送った「渭城柳色図」(敦井美術館所蔵)である。この俊明展は何度も見に行ったが、会場で武田さんの姿を見かけることはなく、後日病没されたことを知った。膨大な調査と研究の上に実現したと思われる会場構成と図録から、武田さんが、研究者として、新潟で何を果たされ、遺されたのか、その詳細を知りたくなった。人柄と業績に光を当てることで、大学の美術研究者と地域の美術に関わる貴重なドキュメントを示せるのではないかと思った。

あくまでも個人的な思いつきを口にしたただけだったのだが、新潟大学旭町学術資料展示館の展示の中で、五十嵐俊明展を担当された大森慎子さんの構成、武田さんのパートナー武田蘭さんの尽力で、形にさせていただけたことは僥倖であった。

今回、やはり俊明展開催に深く関わられた岩田多佳子さん(安吾 風の館学芸員)にお話を伺い、俊明研究に武田さんの果たした大きな役割を教えていただき、あわせて1964～85年に新潟市にあったBSN新潟美術館の副館長、長谷川四郎氏が、俊明研究の先駆者であったという、武田さんが同展図録に書かれていたことも改めて確認できた。

長谷川氏は新潟市の古美術商の家に生まれ、近世絵画に身近に接して育った人だった。その氏が「美術館」という活動の場を得て、最初におこなったことは、県外から近世美術の優品を借り出し、新潟の人々に見せることだったという。当時は大概の家にまだ床の間や掛け軸があった。それらを美術館のガラスケース越しに見ることに、とまどう観客もあるという時代だった。やがて氏は新潟の美術(絵画や書など)に興味を深めて、それらを探求する中で「越後絵画史」を現存する作品を通じ明らかにするという夢を構想しながら、まとめきることなく2000年に道半ばで逝去された。その残されたバトンを、BSN美術館学芸員だった岩田さんや、武田光一さんら大学の先生たちが受けとめ、さらに大森さんや、中村里那さん(みなとびあ学芸員)らの若い研究者も加わって実現したのが2020年の五十嵐俊明展だったのである。

その長谷川氏は、日本社会の大きな変化の中で、床の間の存在が薄まり、消えていこうとしていること、そのことによってかつて日常生活の中にあった屏風、襖絵、軸装の絵などが人々から縁遠くなっていくことに危惧を感じていたという。

今回の展示では旧小澤家住宅、旧齋藤家別邸、北方文化博物館新潟分館、砂丘館など、明治～昭和初期に建設されたお屋敷を会場に、新潟市の旧家に今も残る絵や工芸品などを紹介した。砂丘館では江戸時代には廻船問屋を営んでいたS家所蔵の五十嵐俊明の六曲一双の屏風、狩野栄川古信の掛け軸、佐渡生まれの鍔金作家佐々木象堂の鳳凰像を二階座敷に飾ったが、畳間という空間で、美術館のガラスケースで見るとはまったく違う表情をそれらが、ことに屏風絵が見せたのが新鮮だった。箔をおされた金雲の、何とも言えない華やかさと、障子越しに差す外光の変化で、大きくその表情を変えることなども発見だった。長谷川四郎氏が構想し、武田光一さんやその後の研究者たちが姿を明らかにしようとしてきた「越後絵画史」の時空に、訪れた人たちが、自然に誘い込まれる入り口を、ささやかながらも提供できたのではないかと感じている。武田さんにも見ていただきたかった。



武田光一さん愛用のスライド映写機



愛用のカメラ



矢島群芳展関係資料

# 新潟大学旭町学術資料展示館の展示について

## 大森 慎子

新潟市歴史博物館 学芸員

この度、本事業に関わり、センター館である新潟大学旭町学術資料展示館(以下あさひまち展示館)の展示を任されたので、ここでは、企画構成するにあたっての考え方と展示について報告する。

本展示については、全体の展示構成、レイアウト案の作成を行ったが、具体的な展示内容、展示資料の選定とレイアウト、パネル原稿等については、前半部分は新潟大学教授田中咲子氏にお願いをし、後半部分を担当した。

### 1. 展示の3つの軸

あさひまち展示館は、本事業「みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト」のセンター館として位置付けられていた。約60㎡という小さな展示室ではあるが、ここで行うべき展示は、他会場での「美術作品に触れて湊町文化を感じていただく」というものとは違うものと考えた。

第一には、なぜ新潟大学がこのようなイベントを行うのか、その趣旨を伝えること。

第二には、様々な会場を巡る契機となる展示にすること。

第三には、本プロジェクトの目指すものが成果をあげるために何をすべきかを考えるヒントとして、これまでの取組みを伝えること。

以上の3点を軸に展示を考えていくことにした。

### 2. 展示の構想

当初、あさひまち展示館の展示企画を任されていた大倉宏氏(砂丘館館長・新潟絵屋理事長)から提案されたのが、武田光一新潟大学名誉教授をメインとして紹介するというものであった。武田氏は池大雅はじめ南画を中心とした日本近世絵画の研究者として功績を残す一方で、新潟での普及活動や越後絵画史研究にも尽力し、2020年に惜しくも亡くなられた。大倉氏は、夫人の武田蘭氏の協力を得て展示のための調査も行っていった。さらに、この展示を膨らませるものとして、長年武田氏とともに越後絵画史研究を行ってきた岩田多佳子氏(安吾風の館学芸員・元中野邸美術館学芸員・元BSN美術館学芸員)へのインタビューを行った。それにより、新潟における美術館誕生の話や、越後絵画史研究の道を切り拓き後進を導いた長谷川四郎氏との出会いと活動、長谷川氏の遺志を継いで武田氏が最後に実現させた五十嵐俊明展のことなどの貴重な話を得られた。

武田氏の新潟での活動そのものがプロジェクトの趣旨と一致していたため、武田氏の紹介を展示の核にすることにした。しかし、それだけでは企画の趣旨を理解しにくいため、前段として新潟大学の多くの分野が地域と関わっていること、さらに代々芸術分野の先生方が新潟の芸術文化形成に大きく貢献していることを紹介し、地域の芸術文化の継承にお

いて新潟大学が旗振りをする必然性を明確にすることを提案した。

そのために、武田氏とともに久保尋二新潟大学名誉教授も取り上げ、新潟の美術の歴史を明示することにより、人々に新潟の文化の存在を意識させ、継承の種をまいたお二人の功績を伝えたいと考えた。

また、本企画の趣旨から、岡村浩新潟大学教授主宰の越佐文人研究会の活動を紹介すべきではないかと思った。同会は個人所有の書画等の文化財を展覧会という形で紹介し、さらに研究誌の発行で個人の調査研究の発表の場を作るという活動を25年に亘り行っている。しかし、今回はスペースの問題があり、現役の先生方の活動は簡単な紹介にとどめることにした。

さらに、田中氏の提案で美術以外の分野として、新潟の音楽・踊りを長年研究している伊野義博新潟大学名誉教授の業績を紹介し、対象となる文化に広がりを持たせた。

加えて、新潟大学の過去の実績として、学生が主体となり地域の方々と共に、地域の歴史文化の掘り起こしと継承を企てたアートイベントについて紹介した。

他会場への誘いとしての作品展示は、あさひまち展示館スタッフの交渉で、新潟の湊町の営みを担った旧家伝来の貴重な作品を出品いただけることとなった。また、武田氏の展示を補足する作品として、個人コレクターからもご協力をいただき、見応えのあるものとなった。

### 3. 展示構成

#### (1)プロローグ

「牛木辰男学長挨拶及び丹治嘉彦プロジェクト実行委員会会長挨拶」によるプロジェクトの趣旨と、「新潟大学と越後佐渡の芸術」パネルにより1949(昭和24)年の新潟大学開学以来の芸術分野における取組みを紹介し、大学の地域における先導的な立場を明らかにした。

#### (2)「序章 現在の活動」

伊野義博名誉教授・岡村浩教授の活動紹介と、「うちのDEアート」「西区DEアート」といった学生が中心となり教授陣、町の人々とで協働したアートフェスティバルを本プロジェクトの素地として紹介した。

さらに動線の正面で観覧者を迎えるように、湊町新潟で守り伝えられてきた「貼交屏風」(二曲一隻・個人蔵)を展示した。

#### (3)「第1章 新潟の美術史を編む―久保尋二と新潟」

1960年に新潟大学に着任したイタリアルネサンス美術の専門家である久保尋二氏は、研究の傍ら同時代の新潟のアートシーンや美術の歴史について幅広い知識を持ち、県域全体を概観した美術史を著述した。美術を中心とした新潟の芸術文化の存在を人々に提示した功績により、退官後に招かれて新潟市美術館の館長を務めることにもなる。研究に関する著作物と、久保氏が論述している中原悌二郎作「若きカフカス人の肖像」(ブロンズ・新潟大学所蔵)も展示した。

#### (4)「第2章 新潟の近世美術を掘り起こす―武田光一と新潟」

武田氏は1981年に新潟大学に着任。日本近世絵画史研究を始め数々の業績がある中、新潟での活動を中心に紹介した。大学での教育活動、講座等の市民への普及活動、地元の要請に応じた調査や研究、博物館の展覧会等に関り、主導、連携する中で次代の芽を育てた。これらの活動は私たちが文化を守り継承するにあたり、誰とどう向き合い何をすべきかを示唆している。

## 「2-1 研究と人物像」

研究の紹介では、業績紹介文は東京文化財研究所の安永拓世氏にご協力いただき、著作物や教授推薦書などを展示した。人物像の紹介では、子どもの頃のノート2冊、歴史を調べ挿絵入りでまとめたものと、漫画がぎっしり描かれたものを展示、さらに、高校生時代からの親友4人組のひとりである中野康司氏(元青山学院大学教授、イギリス文学者、翻訳家)から「畏友 武田光一」として文章を寄せていただいた。幅広い好奇心と探究心、リーダーシップも兼備え、多くの人に慕われていた姿の一端を紹介した。

## 「2-2 学生への指導」

大学における教育者としての一面を、ゼミの卒業生である林奈美恵氏(公益財団法人古川知足会 古川美術館学芸員)に「武田先生の授業内容」としてまとめていただき、紹介した。研究の厳しさに相対する実践的な指導で、学生の主体性を育てたことが伝わるものとなった。実物展示はレポート課題、試験問題、授業で使用した「唐詩画譜」(復刻)を展示した。

## 「2-3 市民への普及活動」

あさひまち展示館で企画開催した展覧会と、新潟市主催のいがた市民大学、新潟絵屋主催の市民向け講座の3つを紹介した。

「2-3-1 当館(あさひまち展示館)の展示」：最晩年の2020年に企画開催の「矢島群芳展」と2003年の「本物・ニセモノ・複写・複製」展を紹介した。実物展示としては、「本物・ニセモノ・・」展で展示した曾我二直庵「鷲鷹図屏風」(二曲一隻・新潟大学所蔵)を展示。日本画教授山本真也氏による模写を並べることはかなわなかったが、同寸の部分写真のパネルで比較し、当時の疑似体験ができるようにした。

山本氏と武田氏は、新潟大学在勤時は最も親しく酒を酌み交わす仲間でもあった。山本氏が描いた「鯛賀先生観画図」(一面・個人蔵)のモデルは大雅研究者の武田氏で、この作品と、武田氏の訃報に際し山本氏が描き捧げた「献花」(一面・個人蔵)を所有者のご厚意で展示させていただいた。

「2-3-2 いがた市民大学と南画会」：2001年に「いがた市民大学」(新潟市主催)の講座コーディネーターを依頼され実施した「講座 南画に見る人間性」と、後に発足した「南画会」を紹介した。講座は第一線で活躍中の専門家たちを揃えた講師陣等本腰の内容で、それに参加者が心を動かされ、講座終了後に武田氏を指導者として迎えた自主研究会「南画会」が発足された。

「2-3-3 新潟絵屋での講座」：2018年に新潟絵屋で開催した講座「日本美術の展開」を紹介した。正倉院から江戸時代まで、中国の影響を受けながら展開する日本絵画のすばらしさを伝えた市民向け講座であった。文章をスタッフの井上美雪氏から書いていただき、さらにここでは、愛用のスライド映写機も展示した。

## 「2-4 近世越後美術史研究」

加茂市の天井画の調査と、越後絵画史の研究、その延長線上で手掛けた五十嵐俊明展を紹介した。

「2-4-1 加茂市の文化財調査」：共に調査を行った中澤資裕氏(加茂市職員)より資料提供いただき、2001～2006年に至る調査・講演会をパネルで紹介した。調査で撮影した写真と、愛用のカメラも展示した。

「2-4-2 越後絵画史研究から五十嵐俊明展へ」：長谷川四郎氏との出会いと越後絵画史の研究、五十嵐俊明展の紹介に併せ、近世越後の絵師五十嵐俊明、白井華陽、森蘭齋、銅雲泉、五十嵐竹沙の絵画を展示した。

新潟への赴任で長谷川四郎氏(当時BSN美術館副館長)と出会い、長谷川氏からの誘いで鶴田一雄新潟大学教授、野中浩俊新潟大学教授(現・新潟市會津八一記念館館長)、岩田多佳子氏(当時BSN美術館学芸員)も交えた越後絵画史研究会を立上げる。調査・検討を行い、本の制作が具体化し執筆を開始したところで長谷川氏が亡くなる。時を経て武田氏が遺志を継ぎ、岩田氏と新たに学芸員2名を加え、2020年新潟市歴史博物館で「生誕320年記念特別展 五十嵐俊明」を開催した。武田氏執筆の図録原稿、展覧会紹介(新潟日報掲載)記事と図録、また翌年本図録が國華展覧会図録賞を受賞した際の贈呈式パンフレット、賞状も展示した。武田氏は五十嵐俊明展の会場を訪れることはかなわず他界されたが、國華では立場の違いを乗り越え共同で地方美術研究を進めた事が評価され、今後の研究の道を照らしてくれるものとなった。

そして、会場最後の締めくくりとして、旧家に伝わった五十嵐俊明の六曲一双屏風(個人蔵)を展示し、堪能していただいた。

## 4. 展覧会を終了して

本展では、名前を出させていただいた方々のみならず、燻蒸、屏風の仮修復、パネル作成、展示など、多くの皆様からのお力添えをいただき完成することができた。改めて深く御礼申し上げたい。

意図や思いが伝わるかと不安もあったが、アンケートでは文化財の保存にまで言及した感想もあり安堵した。一方で来客が巡る会場数の少なさは回遊の契機の点で課題を残した。

この度の事業の一番の課題は、実働人数の少なさであったと思う。一人の負担の大きさから、広報の遅れや、目的達成にやるべきことにも手が行き届かなかった。これはイベント開始の決定から時間がなかったことも大きな要因であろう。

本プロジェクトの目的達成には、長期的な取組みが必要である。看過できない文化財喪失の危機を迎えている今、これを単発のイベントで終わらせず、多くの人に文化財を守る意識を持っていただくための取組みや、市民、職人、企業、行政、大学、博物館等が連携を強化し、多くの人々の手で文化財を守り継承するための仕組み作りができれば、新潟にとり意義深いものとなるであろう。

久保・武田両先生が先鞭をつけ拓いた道を、バトンを継いだ私たちは先へと進め、より豊かな文化を育む使命がある。このことを自覚して、今できる事、すべき事を考え、緊急かつ長期的にこの課題に取り組む必要があることを、本プロジェクトに参加させていただき、学ばせていただいた。

## 新潟の美術と新潟大学

### 田中 咲子

新潟大学人文学部・教育学部 教授

（新潟県）

（新潟県）

（新潟県）

今回の展示会場の一つ新潟大学旭町学術資料展示館では、2012年3月まで本学で教鞭を執った武田光一名誉教授(1946-2020)の研究教育における功績に焦点を当てた展示内容となった。本学には武田氏以外に日本・東洋美術史を専門とする専任教員が在籍していないが、西洋美術史においては、専門とする時代はさまざまであるものの、教育学部のほか近年は人文学部にも複数名が所属している。歴代の教員は、美術全集の執筆といった全国的な活躍だけでなく、新潟の美術や美術教育に貢献してきた。また制作においては、日本画、洋画、彫塑、工芸、デザインといった実技諸分野の教員が教育学部に在籍し、作品制作や学生指導などにあたってきた。なかでも教育学部美術科においては、早くから地域密着の活動が行われてきたという特徴を指摘できる。この地域の図工や美術の教員養成だけでなく、教員自身が、あるいは教員と学生が一緒になって地域と関わる活動を重ねてきた。

今回の旭町展示館会場の展示では、武田光一氏の研究教育活動と並んで、新潟大学の芸術系教員の活動の一端も紹介した。そこで本稿では、特に美術分野に絞って、新潟の芸術における本学の研究教育の貢献の一部を改めて振り返ってみたい。尚、武田氏の活動については大倉宏、大森慎子、両氏の別稿に委ねたい。

### 高田分校「芸能科」

新潟大学は1949年に新潟医科大学、旧制新潟高校、県立農林専門学校、長岡高等工業学校、そして師範学校を基礎として総合大学として開学した。その際、教育学部は、新潟市にあった新潟第一師範学校と長岡市の新潟第一師範学校女子部、そして現在の上越市にあった新潟第二師範学校(高田師範学校)、新発田市の新潟青年師範学校を新制新潟大学に移管する形で誕生した。新発田の分校は1956年に廃止されたが、長岡分校と高田分校は、医学系を除く学部の五十嵐キャンパス移転に伴い全分校が統合する1981年まで、30年余りにわたって活動を続けた<sup>1</sup>。なかでも高田分校の「芸能科」(音楽、美術、書道)はその後も一年間高田にとどまり、翌1982年に新潟本校に完全統合となった。それまでの32年間、高田分校「芸能科」は本学の芸術教育の拠点として機能するとともに、多くの芸術家を輩出し、また様々な形で市民との活発な交流も重ねた。学園祭には多くの市民が訪れ、また市民とともに活動する絵画サークルや美術団体が結成され、コンクールなども開催されている。高田分校廃止の際に市民から上がった廃止反対運動は、市民との絆の深さを物語る<sup>2</sup>。

### 久保尋二氏の研究活動

久保(1931-2008)は新潟県出身で、東京藝術大学で美術史を修めた後、1960年に新潟本校

の教育学部美術科教員として本学に着任した。専門はイタリア・ルネサンス美術史で、とりわけレオナルド・ダ・ヴィンチの『マドリード手稿』の翻刻、翻訳を分担するなど、当時の日本のレオナルド研究における第一人者と目されていた。他方で、近世以来の新潟の美術を渉猟し、本県の美術史の編纂にも尽力した。その研究成果は『新潟県美術名鑑』(1995年)や『越佐の画人』(1987年)など数々の書籍に結実しており、これらは今でも本県の美術の基本資料となっている。なかでも『新潟県美術名鑑』巻頭の「新潟県の美術総論」は江戸後期の五十嵐俊明から平成に至る幅広い時代を網羅する。また、1974年5月から76年8月にかけて、小町谷朝生とともに『新潟日報』において「にいがた美術散歩」と題したコラムを担当し、県内所蔵や県ゆかりの作品を毎回1点ずつ紹介してきた<sup>3</sup>。

久保は1996年に本学を定年退官して名誉教授となり、2004年から06年にかけては新潟市美術館長を務めた。

### 「うちのDEアート」

1998年、新潟大学教育学部が教育人間科学部として改組され、教員免許取得を必須としない新たな課程の一つとして、芸術環境創造課程が設置された。そのうち造形表現コースの学生たちが中心となり、2001年、キャンパスにほど近い内野地区でアートプロジェクト「うちのDEアート」がスタートした。これは学生と教員が地域住民とともに地区の空き家や神社、公園などを舞台に作品を展示したり、子供や地域住民が作品づくりを体験するワークショップを実施したりする、いわゆる芸術祭である。前年の2000年に越後妻有トリエンナーレ大地の芸術祭が十日町、津南地区で始まったことに刺激されたことが開催のきっかけだったという。当初は住民の理解を得るのに苦労したが、2009年に地区を流れる新川の川面に無数の発光体で彩った作品《シンカワホタル》がある学生によって制作されると、2012年からは内野の住民団体がこれを受け継いで設置し、夏の風物詩となるに至った。また、それまで作品発表は学生や招聘アーティストに限られていたが、2015年には《うちの七人の職人と新大美術科のたまごたち》と題して、地区に住む様々な分野の職人が技を駆使した作品を披露した。このアートプロジェクトは足掛け16年にわたって開催され、その間、大学と地域住民の相互理解と交流は着実に深化していったが、芸術環境創造課程の廃止もあり、2016年に幕を閉じた<sup>4</sup>。

### おわりに

芸術環境創造課程の廃止による学生数の減少や、近年の学部教員の削減もあり、アートプロジェクトのような大々的な活動は、近年ではできなくなった。しかし規模の小さなプロジェクトは今も個々の教員が実施している。また、県内にある寺社の天井画などの再現事業といった文化財保護や、市内の個人が所蔵する近世絵画を紹介する展覧会の開催なども行われている。新潟の美術に対する本学の貢献は、新たな形を模索しながら続いている。こうした活動が、今回の「みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト」の発案、実施につながったともいえよう。

<sup>[1]</sup> コラムは後に単行本として出版されている。久保尋二、小町谷朝生「にいがた美術散歩」(新潟日報事業社)1977。

<sup>[2]</sup> 2007年以降、新潟市西区役所が「うちのDEアート」に参画し、地域と行政と住民の三者で運営されるようになった。これに伴い公式事業名も「西区DEアート」と変更された。「うちのDEアート」の詳細については次の書籍を参照。新潟大学教育学部芸術環境講座(美術)編「うちのDEアート15年の軌跡―地域アートプロジェクトを通じて見えてきたもの」(新潟日報事業社)2017。

## 地域の文化財「発掘」の重要性

### 久保 有朋

旧齋藤家別邸 学芸員  
古町花街の会 事務局長

#### 1. 地域の文化財「発掘」の重要性

私の出身地である新潟市南区白根では、江戸時代中期が起こりと伝わる伝統行事「大風合戦」が今に継承されており、毎年のお祭として地域内外の人に親しまれ、伝統的娯楽文化として地域に根付いている。他方、白根地区は県内随一の歴史的町並みを有している。大風合戦は町並みを見下ろせる土手上や町屋に囲まれた路地空間で行われ、沿道に並ぶ祭屋台の背後には今も様々な商店が営まれる町屋が連なっており、歴史と町並み、伝統行事、そして生活は密接に関連して現在に生きている。しかし、大学で町並みや文化財を学ぶまで、私は町並みの中で生活しながらその価値が見えていなかった。今後、地方都市が生き残っていくためには、地域の文化財を掘り起こし、地域住民が自ら価値を再発見し、地域のアイデンティティを次世代に繋いでいけるかが鍵になると考えられる。

本稿では、文化財の公開活用やまちづくりの実践者の視点から、本プロジェクトの主要テーマ「歴史文化遺産の継承、公開、活用」の一事例として古町花街と旧齋藤家別邸での取り組みを紹介し、今後の文化財の継承・活用を推進する一助としたい。

#### 2. 古町花街の文化的価値とまちづくり活動

花街は日本舞踊や邦楽、伝統建築、日本庭園、日本料理、日本酒、着物、書画骨董、茶道、華道等、日本の有形無形の伝統文化を包括的に継承する希有な場である。新潟の古町は日本有数の花街であり、特に大正期から昭和初期にかけて最盛期を迎えた。古町花街は今も芸妓を呼ぶことのできる伝統的な料亭が12軒営業している現役の花街であり、その殆どが古町通8・9番町界隈の一角で営業している。現在、古町のように料亭が一角に集積している花街は全国に例がない。さらに、この一角には元は料理屋や待合、置屋として建てられた歴史的建造物が数多く残っており、歴史的町並みが残る伝統的料亭街として古町花街は全国随一と言える。また、料亭中心の花街である古町の景観は、茶屋中心の花街である京都や金沢のような軒が揃い統一感のあるものとは異なり、歴史的風情の中に多様性を感じられる景観であることも特徴と言えよう。

近年、古町花街の有形無形の文化財の価値を掘り起こし、磨き上げ、活用する動きが地元市民団体や経済界、行政等により進められている。ここでは、私が中心的に関わっている景観・文化財保全を主とした活動を紹介する。古町花街の会は、花柳界や経済界、地元飲食店、大学、一般市民等、古町花街地区に関わる多様な組織・個人により2012年に結成された市民組織である。この会は古町花街の歴史的町並みの保全、花街文化の継承及び広報等の活動により、新潟の観光振興や地方創生に繋げることを目標としている。これまで、市と協働での景観保全制度の策定・運用、「古町花街たてものマップ」の制作、提灯による情緒ある景観演出、観光案内板の制作、舞踊公演「ふるまち新潟をどり」の企画協力等を行い、2018年には会の活動が日本ユネスコ協会連盟の「プロジェクト未来遺産」に登録された。さらに、

2019年には地区内のあらゆる組織が連携する画期的な自主防災組織「古町花街地区防災会」を結成し、地区内での消火訓練や清掃活動の定期実施、防災ワークショップ開催やパンフレット制作による防災啓発等、地域防災の体制づくりや消火設備の拡充を進めている。

#### 3. 旧齋藤家別邸の公開経緯と活用

旧齋藤家別邸は、近代には新潟三大財閥の一つに数えられた豪商「齋藤家」の四代・齋藤喜十郎により大正6年～9年にかけて造られた別邸である。第二次世界大戦後の昭和20年～25年には進駐軍に接収され、昭和28年には新潟の建設会社・加賀田組社長の二代・加賀田勘一郎により購入された。勘一郎は文化への造詣が深い人物であり、茶会や囲碁本因坊戦の会場等、文化的かつ公開的な活用も行われた。しかし、平成17年に不動産会社の所有となり庭園・建物の存続が危ぶまれ、市民による保存運動が開始された。平成20年には「旧齋藤家夏の別邸の保存を願う市民の会」が発足し、保存に向けて様々な活動が行われた。その結果、平成21年に新潟市により公有化され、耐震補強等の整備工事や条例の制定を経て、平成24年から指定管理による一般公開が開始された。現在、年間約5万人が来館する新潟市を代表する文化財施設の一つとなっている。平成27年には、文化庁より「日本海岸に沿って発達した新潟砂丘の地形・植生を生かしつつ、地域に固有の石材を多用し、石組みの大滝から水を落とすなど、大正期における港町・商都新潟の風土色豊かな庭園の事例として優秀な風致を伝える」点が文化財として高く評価され、国の名勝に新潟市内で初めて指定された。

旧齋藤家別邸では年間を通じて様々な展覧会や講座を開催している。展覧会としては、日本の伝統行事に合わせて2～3月に「ひなまつり」、4～5月に「五月人形展」を開催し、伝統的な和の空間を総合的に体験できる場を提供している。11月には秋の紅葉に合わせて夜間の特別開館と庭園のライトアップを行い、文化財の魅力を多角的に味わえる機会としている。8月には「齋藤家納涼会」、9～10月には「古町花街展」を毎年開催し、その他不定期で地元の職人や作家、近隣博物館とも連携した展示を行い、地域文化の発信にも取り組んでいる。講座としては、日本の伝統建築や庭園の魅力を学ぶ講座、水引で様々な小物を作る講座、五節供や伝統的な和室の床の間飾りを学ぶ講座等、主に和の伝統文化を体験しながら学べるものを開催している。

#### 4. 文化財の継承・活用の推進

現在、特に高い価値を有する有形文化財には、公的に管理・活用されている例が多いが、全国的に行政の予算が逼迫する中で、文化財の管理不全が起きている。文化財の継承・活用を進める上では、文化財保護と観光利用のバランスを取ることが肝要であり、そのためには文化財・観光・まちづくりの各担当課の連携が必要不可欠と考えられる。一方で、国内の有形文化財の大半は個人が所有する私有財産である。昨今の地方行政の財政事情を鑑みれば、行政が新たに多くの文化財を取得し活用することは期待できない。

今後、文化財の継承・活用を推進するためには、所有者の負担を地域で共有する仕組みが必要である。官民連携での補助制度やファンドの設立等、各地で様々な取り組みがなされているが、継続には「文化財は公共財」であり、個々の建物が街の顔を作るという認識を広める必要があろう。併せて、一人一人が地域に愛着とアイデンティティを感じられるよう、地域文化の磨き上げや地域内外への情報発信も不可欠である。また、学校教育の総合学習の中で、地域の歴史を可視化し実感を持たせる装置として、現存する文化財や町並みを活用することも有効な手法になり得る。今後も自らの手の届く範囲の取り組みを継続しつつ、その輪を広げる活動も精力的に行っていきたい。



四季草花図屏風 行田魁庵 嘉永3(1850) 個人蔵  
(本作品は会期中に展示しておりません)

関連  
イベント





2023年9月23日(土・祝)13:00～15:00

[会場]  
ゆいぽーと

新潟市芸術創造村・国際青少年センター  
工房・ギャラリー、クリエイティブルーム1  
新潟市中央区二葉町2丁目5932番地7

[講師]  
永吉 秀司

新潟大学教育学部准教授  
公益財団法人日本美術院特待

## 体験講座レポート 名作とコラボしよう！ 俊明さんの《龍虎図屏風》体験講座

各施設での展示に先駆けたイベントとして、このワークショップを開催しました。

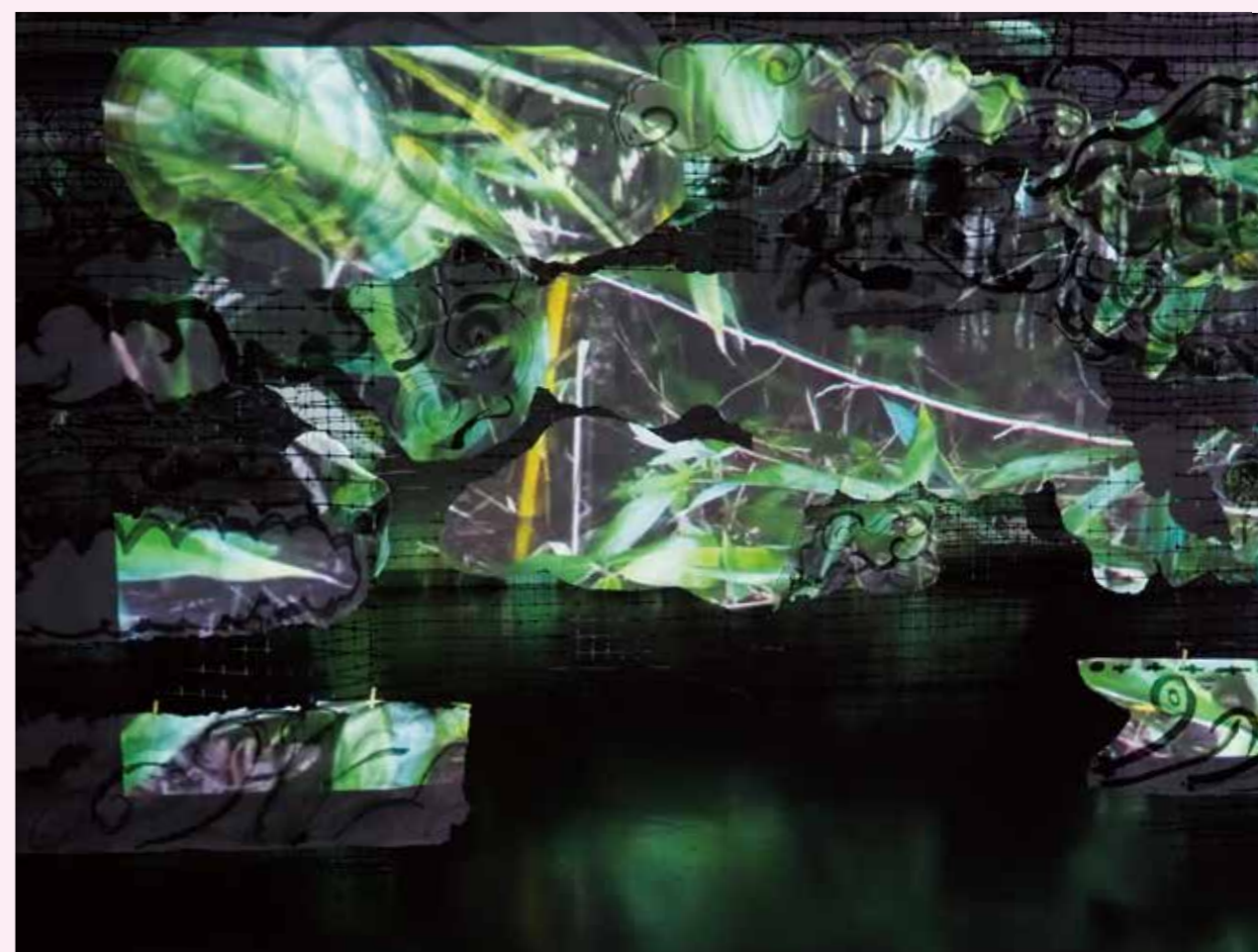
参加者は、日本の伝統的な技法や描画道具の用法について、講師の実演をもとに理解を深めつつ、新潟大学教育学部美術科の学生たちと共に、墨の濃淡や和紙が水分を含むと解れやすくなる特性を活かした「くいさき」という技法を応用し、それぞれが新潟の絵師・五十嵐俊明の描く龍のいる世界をイメージして瑞雲を制作しました。

その参加者が制作した瑞雲を、空間の中で立体的に構成し、そこに学生が創作・編集した、五十嵐俊明作《龍虎図屏風》の龍虎を素材とした動画を投影することで、屏風がもつ臨場体験的な描画手法を、映像と半立体スクリーンという現代的な手法を応用し、一つの協働作品として作り上げました。

参加者は、学生たちを意見交換しながら個々の制作を楽しみつつ、五十嵐俊明の作品における世界観を想像し、作家の構想や創作活動を追体験するかのようにつまみ構想や意見を出し合い、今も昔も変わらない想像力の世界を共有する良い機会となりました。

作品は、11月8日(水)まで、ゆいぽーとの工房・ギャラリーで展示することとなりましたが、古典絵画と現代表現が融合した作品を展示することで、現代に息づく「みなとまち新潟」の文化的な奥行きを理解する一助となり、この企画に参加した方々は大いに満足した時間となりました。

作品名：俊明のカケラを探して  
制作者：新潟大学教育学部2年 小澤康太・松島咲月・  
筒井日向・平井有佳・江間一誓・一般有志(本企画参加者)  
監修：永吉秀司  
基底材素材：和紙・墨・防獣ネット・結束帯  
映像制作：筒井日向  
取材地：五十嵐浜とその周辺の雑木林  
動画編集アプリ：CapCut





2023年11月11日(土)13:00～15:30

[会場]  
新潟市美術館  
新潟市中央区西大畑町5191-9

[登壇者]  
久保 有朋  
旧齋藤家別邸学芸員  
古町花街の会事務局長  
吉原 悠博  
吉原写真館館主  
写真の町シバタ実行委員長  
新発田まち遺産の会副実行委員長

佐藤 琴  
山形大学附属博物館学芸研究員  
山形大学学士課程基盤教育院准教授  
丹治 嘉彦  
新潟大学旭町学術資料展示館館長  
新潟大学教育学部教授

## シンポジウムレポート

# みなとまち新潟の歴史文化遺産 —継承、公開、活用—

今日、人口流出に伴って市内各地の古民家を取り壊され、そこに保存されていた書画工芸品等の作品も加速度的に失われていますが、その状況は全国と同様に新潟市も変わりません。

このような作品を新潟市内から発掘し市内各施設で展示する「みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト」の一環として、本シンポジウムが開催されました。

## 第1部 事例報告

### 久保 有朋氏

#### 「新潟の歴史文化遺産の継承・公開・活用活動

##### —古町花街と旧齋藤家別邸での取り組み事例—

久保氏からは、新潟市古町おける花街文化とまちづくり活動、旧齋藤家別邸の公開・活用について話していただきました。新潟の古町は日本有数の花街であり、特に昭和初期にはおおいに賑わっていました。また、日本舞踊や邦楽、伝統建築、日本庭園、日本料理、日本酒、着物、茶道等の日本の有形無形の伝統文化を楽しむ場として、現在に継承されています。それら文化的資産を生かした街づくりは長年なされていみせんでしたが、近年は有形無形の文化の価値を掘り起こし、磨き上げ、活用する動きが地元市民団体や経済界、行政等により進められています。今後も花街文化の保全継承活動を推進しつつ、より多くの人への情報発信も行っていきたいとの発言がありました。

また、豪商の別邸として建設された旧齋藤家別邸が、取り壊しの危機を乗り越え、市民運動により現在に継承されてきた経緯、その文化財としての魅力や活用事例等について紹介されました。

### 吉原 悠博氏

#### 「未来にのこすもの」

吉原氏からは、新発田での街の歴史を継承するための活動についてお話していただきました。吉原氏は、実家の写真館に残る大量の家族写真を土蔵で見つけたことがきっかけで、自身のアイデンティティを再認識し、吉原写真館(国の登録有形文化財)の6代目としてその歴史を継承することを選択されました。

新発田市は城下町として栄えましたが、ここ近年駅前通りを中心にシャッター街が目立ち始め中心街の空洞化が進みました。そこで新発田の歴史を守り、魅力ある街にすべく「写真の町シバタ」を市民とともに立ち上げ、街に眠っている写真を展示することをはじめとした、様々な活動を行っています。

また、自身の写真館を含め、街の歴史を未来へどう残していくか・どこに残すのかを模索するため発信し、存在感を示すことで共感者を増やすということを目的とした活動も行っていると紹介がありました。

### 佐藤 琴氏

#### 「山形アーカイブとけっぱつちゃん」

佐藤氏からは山形大学附属博物館を核として地域の文化施設等と連携して構築した「山形アーカイブ」の取り組みと、山形大学附属博物館所蔵の結髪土偶・けっぱつちゃんを通じ広がったつながりについてお話していただきました。

「山形アーカイブ」は地域の博物館が抱えるデジタル・アーカイブの問題と、失われていくまちの記憶を残すという2つの課題をきっかけに考えられ、民間の企業や学生サークル「まちの記憶を残し隊」と協働し、まちの記憶を収集し公開する事業であると紹介がありました。また、アーカイブの公開だけでなく、毎年9月と2月に「ななはく！まちの記憶市」を開催し、収集したまちの記憶を様々なイベントで市民に公開しています。

このような取り組みから重要なことは、博物館や大学ができることをあらゆる場面で発信し続けること、足りないリソースは補い合うことであり、今後も地域とゆるやかにつながりながら、保存・活用といった地域の記憶を残す取り組みを続けたいと締めくくられました。



### 久保 有朋

都市空間「花街」を研究し、花街を全国的かつ分野横断的に研究する研究会「花街空間研究会」に参加。また、古町花街の会事務局長等として、新潟市の古町花街に拠点をおき、花街の伝統文化の継承、歴史的街並みの保存活動等に取り組んでいる。



### 吉原 悠博

美術作家として1980年代から東京を中心に海外でも作品を発表し、2005年頃からは活動の拠点を故郷の新発田に移し、幅広い分野において活動を展開している。



### 佐藤 琴

大学で日本美術史を学び、公立博物館の学芸員を経て、2011年から山形大学の学芸員養成の担当教員に就任。2015年の附属博物館リニューアルオープンに尽力した。



澤村 明  
新潟大学理事・副学長  
新潟大学経済科学部教授



丹治 嘉彦

## 第2部 座談会

登壇者からの発表の後には登壇者と来場者を交えて意見交換を行いました。文化遺産を保存・継承して街の記憶を残すことの大切さ、街の記憶に接することで自己のアイデンティティが意識されること、公開・活用の活動を通して人が関わりあい、刺激しあうことで街の活性化やにぎわいに繋がること、博物館の役割、などが話題にあがりました。

来場者からは2つの質問がありました。1つ目は全国の博物館が総合博物館と冠を変えていく中、今後博物館はどのような形態に変容していくのか。2つ目はシンポジウムの副題「活用」についてです。

1つ目の今後の博物館像については、佐藤氏より、2023年4月の改正博物館法の施行や2022年の国際博物館会議において決議された博物館の新定義を受けて、地域と協働して地域の課題解決を行うこと、また社会の諸課題(例えばSDGsなど)に対して積極的に向き合っていくことが今後の博物館の進むべき方向であり、1つの分野の専門家だけではなく様々な分野の人々と一緒に協働していくことがこれからの博物館像の流れであるとの発言がありました。博物館は今まで専門性に特化した特定の人の為に機能していたと言っても過言ではありませんでした。もちろん調査・研究を主眼に置くことは博物館として重要なテーマではあります。しかしながら、それとともに今後市民とともに様々な仕掛けを創り出し、共に楽しむ時間を共有することが出来る博物館であることが、これからの博物館の姿と言えます。

2つ目の文化遺産の「活用」については、日本における公共性が話題となりました。文化遺産を全て残すのではなく、公共のために何を残すのかというビジョンをもった取捨選択が重要となること、博物館などの公的機関だけが公共の文化財を守るのではなく、住民自らが残したいものを選んで残し、継承していくことの必要性、街の文化財は公共財であるという意識の醸成、など公共性の新たな形がこれからは求められるということが、登壇者それぞれより指摘がありました。



200畳敷きの大広間をもつ料亭「鍋茶屋」



敷地2000坪、元禄からの料亭「行形亭」



新発田城

国指定重要文化財



118年前の1905年撮影

### 山形アーカイブ

- 最上義光歴史館から相談を受けたことが、本事業発案のきっかけの一つ。
- 1989年開館。設置主体は山形市、学芸員1名。予算は年々縮小。特別展は2014年を最後に実施されていない。



### 山形アーカイブ構築

- 最上義光歴史館は学芸員が掲載資料を選択(来館者の関心が高い刀剣)し、メタデータを作成。画像は実績のあるカメラマンに撮影を依頼。
- 山形市郷土館は山形市職員が掲載資料を選択。撮影とメタデータ作成は、実行委員会が雇用したアルバイトが既存の台帳を元に作成。資料の撮影はアルバイトと市職員。作業全体のコーディネイト(ナンバリング、資料分類など)は発表者が担当。



⇒足りないリソース(人・金・ノウハウ)を補いあう





2023年11月23日(木・祝)14:00～16:00

[会場]  
スタジオ・スガマタ  
新潟市中央区東中通1-86 ヴィラ東中通1F

[ヴァイオリン]  
奈良 秀樹  
新潟大学教育学部  
ヴァイオリン専攻卒業生

[歌]  
麻野 恵子  
洗足学園音楽大学講師

[ピアノ]  
山本 緑(武田 蘭)  
洗足学園音楽大学講師

[おはなし]  
永吉 秀司  
新潟大学教育学部准教授  
公益財団法人日本美術院特待

## コンサートレポート

# ちょっとおしゃべりなコンサート 音楽ことはじめ

江戸時代の新潟の美術が同時代の西洋の音楽と出会うと…  
みなとまち新潟の文化の魅力に新たな切り口から迫りました。

この企画は、多くの人に親しまれているクラシック音楽を中心としたピアノ、ヴァイオリン演奏と歌、そして新潟大学教育学部准教授 公益財団法人日本美術院特待 永吉秀司のおしゃべりで構成され実施されました。演奏者によるそれぞれの曲目や作曲家の解説とともに、今回の事業「みなとまち新潟の芸と風土 発掘体験プロジェクトー近世から現代まで」にあわせ、バッハの時代の日本美術や、音楽と同様、作品が過去の作品から影響を受けて成立した好例としての俵屋宗達、尾形光琳、酒井抱一らの《風神雷神図屏風》の話、そして五十嵐俊明といった新潟ゆかりの画家や岡倉天心の話題など、日本美術の話が紹介されました。

今回の演奏項目にあるバッハやリストが音楽に向き合う姿勢についてと人間味溢れるエピソード等を話してもらいました。また、バッハやリストが活躍した時代はちょうど新潟を中心に活躍した絵師五十嵐俊明が生きていた時代と重なり、同じ時代にそれぞれで多様な文化が花開いたことは非常に興味が湧くところです。

今回のコンサートの感想として来場者から「軽快なトークとあふれる知識でとても楽しめる時間となりました」等の声が多数寄せられました。この声は「ちょっとおしゃべりなコンサートー音楽ことはじめ」が誰もが気軽に音楽に触れることを目指し作り上げたことに繋がります。音楽や美術は本来特定の人のものではなく、誰にとっても気兼ねなく関われるものであることを、「ちょっとおしゃべりなコンサートー音楽ことはじめ」は明らかにしました。

## プログラム

- ♪アリオソ …………… J.S.バッハ作曲・シゲティ版
- \* バッハ時代の日本の美術 …………… 永吉秀司
- \* バッハについて …………… 奈良秀樹
- ♪無伴奏ヴァイオリンパルティータ第3番ホ長調 BWV1006より
- プレリュード、ガボット …………… J.S.バッハ作曲
- \* 「作品は作品から創造される」 …………… 永吉秀司
- \* リストについて …………… 山本緑(武田蘭)
- ♪バッハの名による幻想曲とフーガ …………… F.リスト作曲
- \* 新潟ゆかりの日本人画家 …………… 永吉秀司
- \* 岡倉天心と日本の美術 …………… 永吉秀司
- \* 山田耕筈の紹介、ポストマニについて …………… 山本緑(武田蘭)
- ♪芥子粒夫人(ポストマニ) …………… 山田耕筈曲、北原白秋詞



## まち歩き

まち歩きを通してみなとまち新潟の魅力を案内している「新潟シティガイド」との連携企画として、本プロジェクト企画展の展示会場を巡るまち歩きを実施していただきました。11月18日は荒天によりあいにく中止となりましたが、11月19日と11月25日の2日間で新潟シティガイドスタッフの案内により実施しました。

参加者は、ガイドの解説を聞きながら歴史ある街並みを巡ることで、普段の暮らしの中では気づかないみなとまち新潟の魅力を再発見するとともに、各展示会場での作品鑑賞を楽しみました。



まち歩きマップ



### 西大畑コースA

2023年11月18日(土)13:00～15:00(荒天のため中止)

NEXT21 → 正福寺 → 北方文化博物館新潟分館 → 旧齋藤家別邸 → 行形亭

### 西大畑コースB

2023年11月19日(日)10:00～12:00

NEXT21 → 加島屋 → 正福寺 → 砂丘館 → 新潟大学旭町学術資料展示館

### 下町コース

2023年11月25日(土)10:00～12:00

新潟市歴史博物館(みなとびあ) → 旧小澤家住宅 → 加島屋 → NEXT21



感想・  
その他資料

寄尚 蕭遠 巻菱湖 制作年不詳 個人蔵  
(本作品は会期中に展示しておりません)

## 来館者・参加者の感想

### 展示について

- ・美術館で展示ケースに飾られているより、歴史的建造物の中で鑑賞できたことは意味深いと思います。来歴などの説明文がもう少し詳細だと親切かもしれません。(県外・50代)
- ・外国の方にもっと新潟の魅力をアピールするべき！新潟に住んでいても知らない人がいるのもったいないと思いました。(市内・20代)
- ・展示場所と作品の雰囲気があっており、作品の良さが際立っていたように思います。(市内・20代)
- ・地域にこのようなお宝が眠っていることにびっくりしました。(市内・40代)
- ・素晴らしい美術品を伝統ある空間で見るとは、至極の時間を過ごすことができることを発見。(市内・50代)
- ・まだ知らない郷土の美術品があるのだと知りました。(市内・50代)
- ・新潟にはまだまだ多数のお宝が眠っているのでは!?(市内・60代)
- ・新潟の知られざる芸術の研究は、大学のミッションでもあると感じました。(市内・60代)
- ・湊町新潟の豊かな時代に思いを寄せる良い機会になりました。感謝いたします。(市内・60代)
- ・美術館ではなく、このような場で美術と向き合うことができる、こうした企画を続けてください。(県外・50代)
- ・どの会場の作品も建物の雰囲気と相まって素敵でした。ただ、今回見たところではないのですが、展示場所によっては、今回のプロジェクトの作品が、展示場所の展示物や見どころにのまれてしまっている印象を受ける箇所もありました。素敵なプロジェクトなので、より多くの方に見てもらえたらなあと思いました。(市内・20代)

### 体験講座について

- ・みんなで一つの作品を仕上げるのが楽しかったです。(市内・40代)
- ・平面で描いた物を立体的に配し、さらに映像との組み合わせで、新たな体験ができました。(市内・50代)
- ・墨に実際に触れることができ楽しかった。(市内・50代)
- ・学生と協働作業が出来て良かった。コロナが明けて良かったネ。(市内・60代)
- ・墨を使うことが無かったので、楽しかった。(市内・70代)
- ・インスピレーションの大切さを感じました。(市内・80代)
- ・とても楽しく勉強になりました。(市内・50代)
- ・最初はどうかと思ったが、2Fの絵と2Fの映像のマッチングが良かった。(市内・60代)
- ・初めは、結果が想像できなかったが、最後の映像を見て面白いと思った。(市内・60代)
- ・私は部分的に雲が動き、変化するのが、面白かった。(市内・70代)
- ・9/20みなとびあに行って、俊明さんの絵(本物)をみたことが参加のキッカケなのかも知れません。学生さんと久しぶりに会話が出来て良かった。(市内・80代)

### シンポジウムについて

- ・活気がなくなってきている我が町を何とかしたいと思うだけで何も出来ない。何か活動しようにも知識がない。町の記憶、文化が消えていくことは恐ろしいことで、焦るばかりではどうしようもない。取り敢えず一歩出さないとダメだと思いました。(県内・50代)
- ・古町がこんなに歴史のあるものだとは知らなかった。「花街」という認識は県外出身者として無かった。県外へもっとアピールするべきだと思う。(市内・20代)
- ・新潟の文化財の多さが想像以上であり、まちの記憶について本気で考えることは初めてであり、若者として力になりたいと思っております。(市内・20代)
- ・山形大学での取組の様子をお聴き出来て良かったです。(発信する)大切さ本当に素晴らしいことです。残すものと捨てるもの…すぐ考えさせられます。(市内・60代)
- ・自分は情報工学分野を専攻しているので、継承活動でデータベースなどを作って残すという形があるということを知り、そういった活動に興味を持ちました。(市内・20代)

### コンサートについて

- ・世界の音楽と日本の美術が繋がっていることが分かった。(市内・10代)
- ・印象に残ったワード「和と洋の融合」、必ずしも「和と和」、「洋と洋」同士が組み合わせるのではない。「和と洋が出会う」ことで、美の発見に繋がる、という気持ちになりました。また、「作品は作品から生まれる」という言葉に深く共感しました。私の中のインスピレーションも深まりました。(市内・20代)
- ・西洋と東洋の度合いは面白いのです。また、音楽と絵の組み合わせも想像以上に新鮮味があります。(市内・20代)
- ・タイムスリップした様な不思議な気持ちを感じながら、その時々生きていた人達と一緒に時間を過ごしているみたいでした。200年300年先へ、この新潟の文化を繋げて行って欲しいです。(市内・50代)
- ・新潟市出身の画家の方々を西洋音楽の歴史に合わせて知ることが出来て良かった。(市内・60代)
- ・日本美術と西洋美術が互いに影響し合っているのは知っていましたが、美術と音楽との関係もお話を聞くことが出来て良かったです。勉強になりました。(市内・60代)
- ・音楽、絵画、歴史を総覧することができて興味深かった。(市内・70代)
- ・音楽と説明を交互にされていてメリハリがあり、飽きることなく集中して聴き入っていた。バイオリンの音はヒーリングされて心地良かった。ポストマニの長編作品にあまり馴染みがなかったため、ストーリーをまとめたものを資料にするか、初めに説明とどの位の長さの曲なのかお話があった方が良かった。(市内・50代)

## 鑑賞者インタビュー



新潟大学教育学部  
美術教育専修 3年  
長谷川 蘭



Yさん  
新潟市内在住  
60代男性



Mさん  
新潟市内在住  
50代女性

今回「みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト」を鑑賞していくつかの気づきが生まれました。まず、旧日本銀行新潟支店長役宅 砂丘館2階にて展示されていた六曲一双の五十嵐俊明作《造船・諸葛亮乗船図》や掛け軸の狩野栄川古信作《梅雉子図》はそれぞれ華やかな印象を持ったとともに、新潟の風情ある建築物と一体化して、日本建築の面白さも同時に堪能することができました。また、旧齋藤家別邸の土蔵に展示されていた立原杏所作、六曲一隻《山水図屏風》は、LEDライトに照らされ風景が浮かびあがるかのような感覚が生まれました。同じく、旧齋藤家別邸の西の間に展示されていた作者不明、二曲の屏風《入船図風炉先屏風》は、金色を背景にぼんやりと浮かぶ船や穏やかな波の描写から時間が止まったような静けさを感じ、北方文化博物館新潟分館にて展示されていた小林日昇作の掛け軸《山水図》は、文章と絵で構成された表現から、暮らしの一部として機能しているように感じられました。

これらの設えは生活の一部に芸術が溶け込む印象を鑑賞者に与えると感じました。例えば、旧齋藤家や砂丘館などの展示会場では、実際に靴を脱ぎ、そして座って他者とやり取りを行う、言わば普段の生活の中に芸術作品が存在していることを強く印象づけるものでした。これらの体験をもとに「みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト」を鑑賞した市民に展覧会終了後、どんな変化や気づきが生まれたのか等の質問をさせてもらいました。

—今回の展覧会を通しての感想を聞かせてください。

Y：古い美術品を展示して、新潟の歴史を見てもらおうという展覧会は、画期的だったと思います。また、一つの会場に止まらず飲食店を含めた複数の展示会場を設えた取り組みも画期的でした。

M：個人蔵であるため、普段日の目をみない作品を様々な場所で、それぞれ工夫を凝らして展示されていて画期的だったと思います。

—特に面白かった作品等について聞かせてください。

Y：町民の文化は美術と関係がないように思っていたのですが、実際には五十嵐俊明という絵師が新潟にいて、絵画の制作にあたっていました。その五十嵐俊明が描いた屏風などが発掘できたのは、大きな収穫であったと思います。作品の質・大きさを含めて、新潟にもこのような作品を描ける人がいたということに改めて認識しました。一般人で名前を知らなかった人も良い作品だなと思われたのではないかなと感じています。

M：旭町学術資料展示館、砂丘館、旧齋藤家、正福寺を鑑賞しましたが、それぞれ良かったです。特に、印象に残っているのは砂丘館の屏風です。砂丘館で展示の監視員を行ったこともあって、長時間座って見ていると時間の移り変わりによって、日光のあたり方が変わり、屏風が生きているかのように感じました。当時の人々も、同じように作品を見ていたのかなと昔のことを想像しながら鑑賞しました。この事業に対して抱いた思いは、私に限らず全ての鑑賞者に共通した思いであったのではないのでしょうか。

—屏風や掛け軸は普段の生活でどのような存在ですか。

Y：現在の生活においては屏風や掛け軸は家で掛けるということはあまりないことから、特別なものという認識です。特に、屏風は現代においては美術館にて鑑賞するものという形になってしまっているかもしれませんが。今回の展示では、床の間に掛けてみることや畳の部屋に屏風を立ててみることができ、日本人でよかったなと思いました。生活が洋風化していく中で、屏風や掛け軸は出すことができなくなっていますが、先人たちがやってきたことを考え直すことができたことが大きな収穫です。

また、屏風や掛け軸はそれを置く場所を選びます。そのため、畳の部屋に屏風が飾られるというのは素晴らしいことだと思いました。それから、屏風は座った時に絵の中心に視線があうような形で描かれているものが多い気がしますし、床の間で客人をもてなす際に、掛け軸は客人の背に掛けてあります。このようなことから、日本なりのおもてなしのようなものがあるのかなと改めて思いました。

M：屏風や掛け軸は、マンションに住んでいることもあり、手元に置くことができず、美術館や博物館でみるものになってしまっています。日常の中で味わう時間も空間もないのが現状です。そのため、今回の展示は屏風や掛け軸を鑑賞できる貴重な時間となりました。畳敷きで座ってみることで、落ち着いて鑑賞することができました。しかし、それもこれから変わっていくものかもしれないですね。

—展示会場と作品の相性はどうでしたか。

Y：色んな意味で新潟というものを考えて展示されたのではないかなと思っています。また、新潟のおもてなしの仕方を感じることができました。城下町でみるスタイルよりも自由ではありますが、上流の家ではそれなりの気品あるおもてなしがあったのかなと思いました。こうした中で、先人たちの奥ゆかしさやすばらしさを改めて感じました。

M：「新潟」というキーワードとして選ばれているため、相性はよかったと思います。また、旧齋藤家で監視を行っていた際に、展示会場に助けられました。外国人観光客の方に「このお家はどうやってお金持ちになったのか」と聞かれましたが、「海運業」を英語で説明することができず、困っていたところ、帆掛け船の絵があったため、それを指すことで、外国人観光客の方に伝えることができました。歴史を踏まえて展示していると、このような場面にも繋がりができるので、そのような意味でも良かったと思います。

—展覧会后、展覧会で鑑賞した作品を通して、日常生活でどのような気づき、あるいは変化がありましたか。

Y：私は、日本画を持っているのは少ないですが、洋画や油絵は持っています。展示を通して、日本人は季節感を大事にしていたのかなと感じました。絵が痛まないということにもなりますが、気がついたら絵を取り換えて楽しんでいたのかなと思いました。今年みたいに夏の高温が続くと春と秋を感じるものがなく、夏と冬の二季のようになってしまい、今までの伝統的な季節感がなくなってしまうのかという危惧があります。しかし、普段の生活の中、季節によって花の絵を出してみたりして部屋の風景を変えることは、我々日本人にとって重要であるということに気づきました。

M：私はおもてなしの心を強く感じました。四季を感じることをひとつとっても、根底にはおもてなしの心があると思います。日本人の中では、おもてなしの心が深く根付いていて、その表れとして、美術や調度品があるのかなと思いました。今でも屏風や掛け軸は飾れなくても、どのお宅でも季節になると玄関先に春ならお雛様や兜を飾ったりしています。このようなことの延長として、美術や調度品を飾ることがあり、気持ちは同じであると思いました。このようなことをこれからも大事にしたいと、今回関わらせてもらって改めて感じました。

### インタビューを終えて

インタビュー終了後、Yさんは「文化は地域を盛り上げることができる」と仰っていたのが印象に残りました。歴史ある文化を未来へ紡いでいくためにも、美術作品や調度品は重要な役割を担っていると、Yさんからのインタビューを通して感じました。また、Mさんからは鑑賞者とのやり取りから、おもてなしの重要性をこれからも皆と共有し続けていきたいという思いが伝わり、文化が生活に潤いを与える一助になるのだと強く感じました。

(長谷川 蘭)





新潟大学教育学部  
美術教育専修 2年  
松島 咲月



Sさん  
新潟市内在住  
30代女性



Tさん  
新潟市内在住  
30代女性

このプロジェクトを通して、普段あまり足を運ぶことのない場所に出向き、その場所に馴染む味わい深い美術品と出会い、美術品に関連した文化人の存在を知ることができたが、見るもの、触れるもの、全てが私にとって新鮮で、興味深いものばかりだった。

今回のプロジェクトでは新潟大学教育学部美術科に所属する学生として会場監視スタッフを務めた。同じような業務は他で何度か経験してきたが、今回は美術作品と向き合う時間を持つことができ、深い学びに繋がったと思う。

「屏風」、「花生け」、「掛け軸」と、プロジェクトの中で発掘された美術品は多種多様なもので、趣溢れる作品が人々の目に留まるように工夫されていた。展示作品の中で特に印象に残ったのは、旧齋藤家別邸に展示されていた屏風作品《秋草図風炉先屏風》(作者不明)である。それは、庭園景色を一望できる二階の奥方にひっそりと佇むように展示されていた。屏風に描かれた秋草と室内から見渡せる秋景色がその場に溶け込み、室内と野外との繋がりを際立たせる作品としてとても重要な役割を果たしていると感じられ、印象深く心に残っている。また、掛け軸や屏風等の美術品が飾られている場所が日本間であることから、今回の事業に展示された作品は日常生活の中でこそ際立つと感じた。

旧齋藤家や加島屋などの展示会場では、椅子に座って寛ぐ人、お茶を一杯嗜む人といった日常生活を悠々と送る人の姿が見られた。その様相から、芸術作品が生活の中に自然と馴染んでいる印象を感じられ、芸術作品が生活の中で私たちと共存しているということを遠回しに示唆しているように思えた。今回の取り組みの中で芸術作品と生活との関係について気付かされることが多々あったが、「みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト」を鑑賞した市民の方々に、生活にどんな変化や気づきが生じたのかなどのインタビューをさせて頂いた。

-今回の展示の中で印象に残ったものは何ですか。またその展示品のどこに魅力などを感じましたか。

S：旧齋藤家別邸に展示されていた《入船図風炉先屏風》が一番印象に残りました。初めは何気ない金屏風と思いましたが、よく見ると船と波が描かれており、反射によって見え方が変化するさまが朝靄の海のようにでもあり、蜃気楼のようにも見え、つい見入ってしまう作品でした。

-今回、屏風や掛け軸などが展示品として見られたと思いますが、ご自身の身の周りや暮らしの中でそのような「文化を感じさせる芸術作品」はありますか？また、それはどういったものですか。

S：自宅にはありませんが、実家の床の間に掛け軸があります。家に代々伝わるものではなく、数年前に父がリサイクルショップで購入していました。

T：自宅にイサムノグチさんのスタンドライトがあります。「AKARI」という商品の一つで、和紙が使われている照明が家に飾られています。明かりをつける度に日本らしさを感じられ、気持ちが落ち着くので、自分の中ではこのスタンドライトが日本を感じさせる作品として心に残っています。他にも、実家の和室にある欄間や、仏間にある仏壇の扉に施された装飾、お盆の期間に見られる「ぼんぼり」などが思い当たります。

-屏風や掛け軸は生活の中でどのような存在ですか。

S：掛け軸は日本家屋の床の間に飾ってあるもの、屏風は金屏風のイメージが強く、お祝い事をするときに使用するものかなと思っていました。掛け軸の方が日常的、屏風の方が特別感があるなと感じています。

-展覧会の後、展覧会で鑑賞した作品を通して日常生活でどのような気づき、あるいは変化がありましたか。

S：これまでは掛け軸などといった昔の芸術作品は床の間や歴史文化施設内に展示されているものとして特別に気に留めていませんでしたが、今回の展覧会以降は、屏風や掛け軸といった作品が自然と目に留まる存在となりました。

T：壺や屏風などはもともと作品として飾られるものではなく、本来は生活の中で使われるものとして昔は存在していたと思います。ですが最近は本来道具として使われるものが、芸術作品として和室の一部に飾られるようになって、鑑賞するものとして成り代わってきました。本来は別の用途として使われるものでも、芸術作品として飾ることでその空間が鑑賞する人にとって居心地の良い場所にすることができたり、鑑賞し向き合えるからこそその物の美しさを見出す機会を得ることができるので、日常生活にそういった芸術作品が取り入れられるのは素晴らしいことだと思います。

-洋室に掛け軸が飾られるなどといった、洋と和が混合した空間についてどう考えますか。

T：良いか悪いかは置いておいて、芸術作品に対して興味を持つきっかけにはなるとは思います。洋室に和風のもの飾られるといったギャップが芸術作品に興味を持つきっかけとなり、芸術作品に関心のない人も美術品と触れ合うことに価値を見出すようになるのでは、と思います。

-最後に、みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクトを通して、気づいたことや感想をよろしくをお願いします。

S：旧齋藤家別邸や砂丘館など歴史的な日本家屋に置かれている屏風や掛け軸を見ることができ、とても貴重な機会となりました。川湊として栄えていた時代のものが現代の新潟に残っていることは私たちにとても貴重な財産だと思います。今回の展示だけで終わってしまうのは非常にもったいないなと思いました。

### インタビューを終えて

今回鑑賞した美術作品は特に和空間に適したものであったと思う。和空間以外において例えば、自室に書画や掛け軸を試しに飾ってみた。その結果、何気ない部屋に彩りが生まれ華やかな空間に変わったことは新しい発見だった。

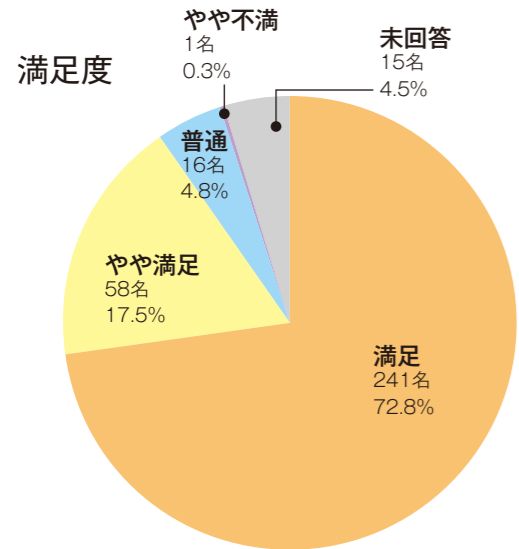
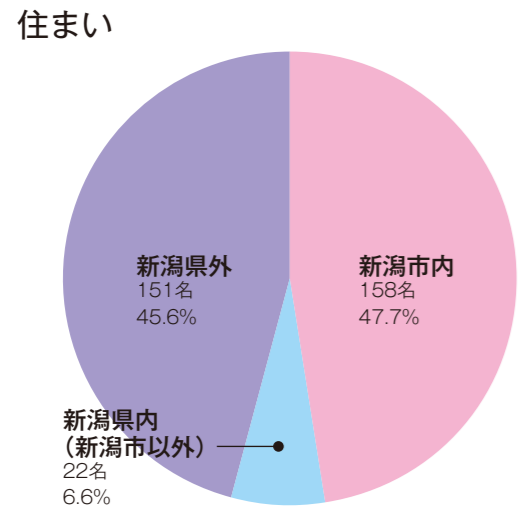
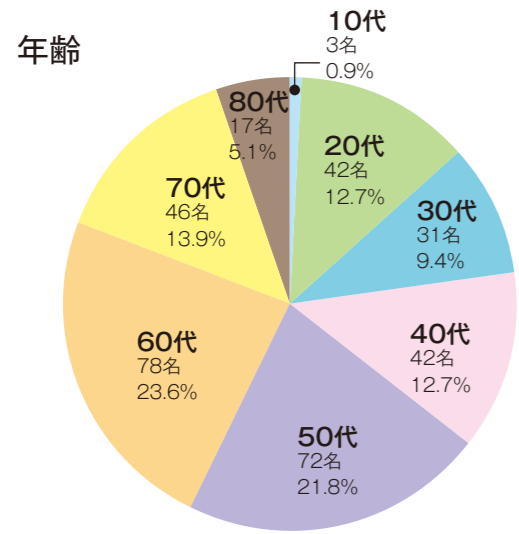
Sさんのインタビューにある屏風や掛け軸と言った作品が自然と目に留まる存在となったこと、すなわち日常生活の一部に芸術作品を何らかの形で取り入れることにより、日々の生活が豊かになることは間違いない。さらにTさんの壺や屏風は本来は生活の中で使われるものという言葉が印象深く、元々屏風等の作品は日常生活と密接な関係であることを改めて実感した。日常生活の中に芸術作品が際立つと感じるのは、本来の姿が連想できるからこそ得られる感覚なのかもしれない。またこのような事業を継続することは市民にとって必要であるとともに、その輪を広げることが強く求められると思に至った。  
(松島 咲月)

### まとめ

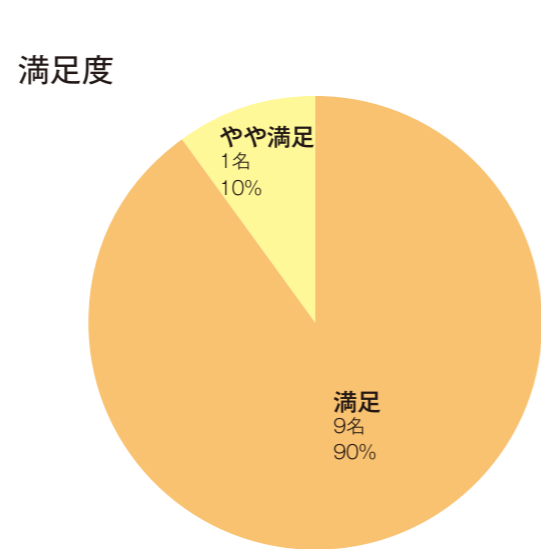
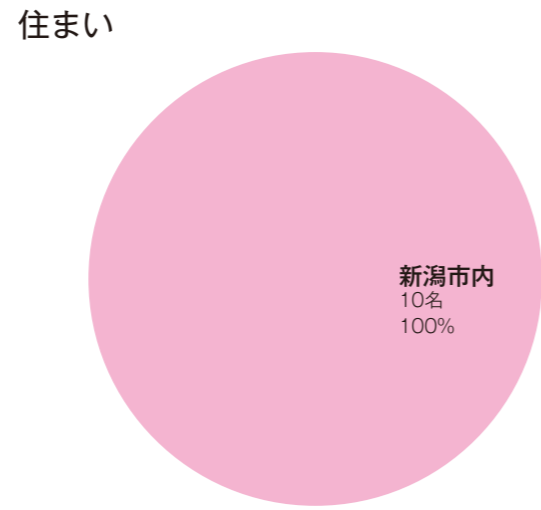
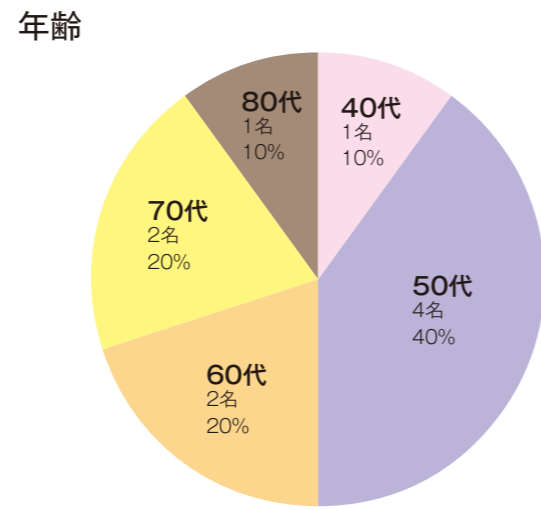
「みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト-近代から現代まで」において展示を行った各施設を鑑賞した市民から観賞後に感想を伺ったが、日頃目にしたことのない屏風や掛け軸といった作品をじっくりと観ることに満足を得ているとの反応が多数あった。これは、美術作品を鑑賞する美術館等の公的な施設での展示ではなく、市民が生活する環境に近い場での鑑賞体験によるところが大きいと考える。また、展覧会が終了した後も日々の暮らしや営みの中での見方や感じ方が深まった等の意見を頂いた。これらの反応は今回の鑑賞体験が一過性のものではなく、市民が日頃の生活の中で気づきや発見を獲得したことの現れであると読み取れる。とは言え、市民からの聞き取りは展覧会が終了して2ヶ月後という時間であることから、時間の経過とともに異なる感想が聞けるかもしれない。そのような声に注視しながら新たな次の扉を開きたい。  
(丹治 嘉彦)

# アンケート結果

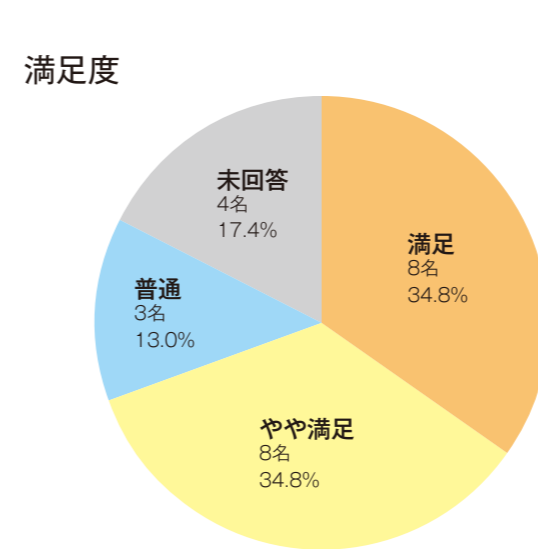
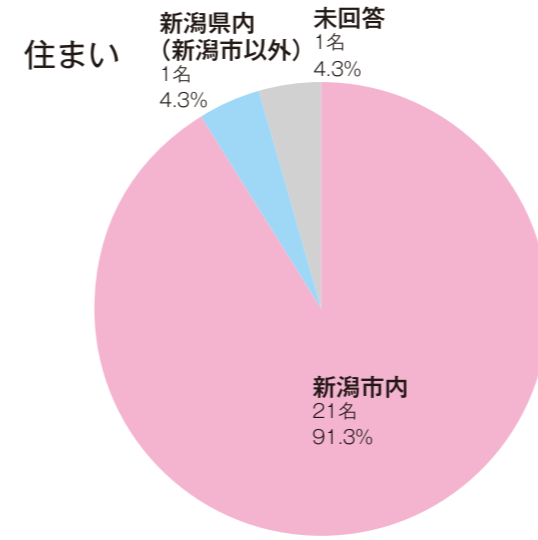
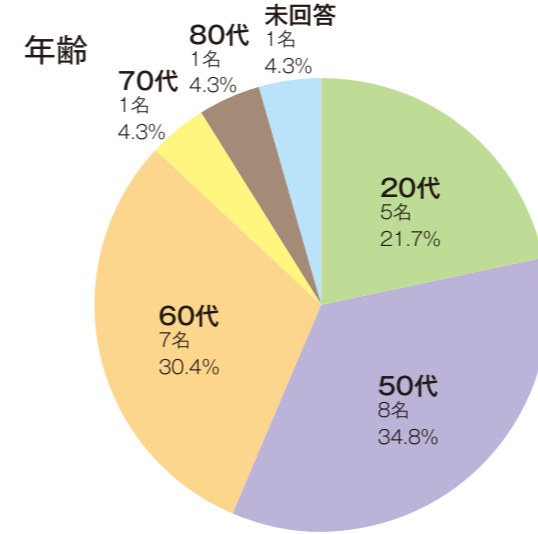
**展示会場**  
アンケート結果 (回答数：331)



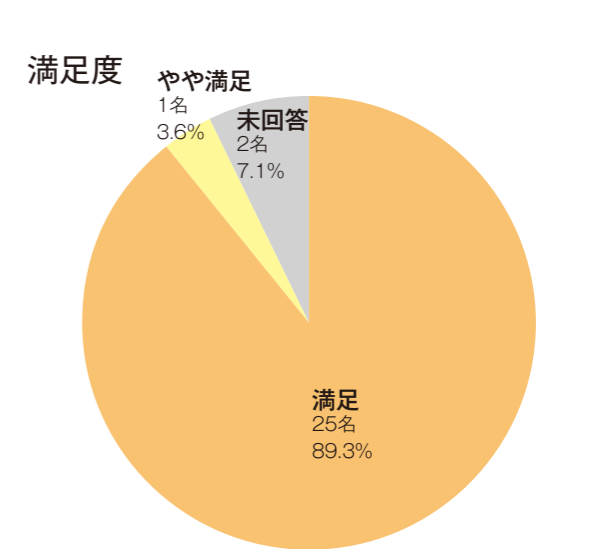
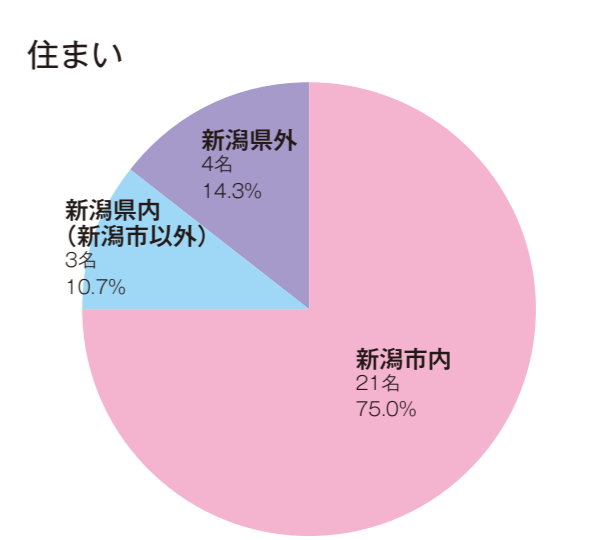
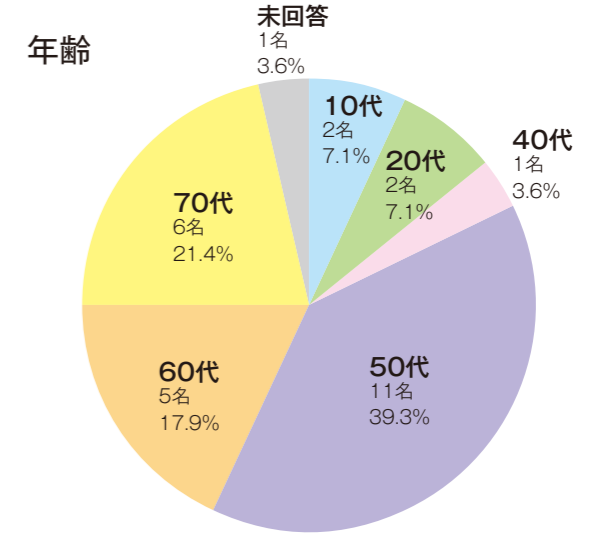
**体験講座**  
アンケート結果  
(参加者数：16 回答数：10)



**シンポジウム**  
アンケート結果  
(参加者数：30 回答数：23)



**コンサート**  
アンケート結果  
(参加者数：37 回答数：28)



※端数処理の都合上合計が100%にならない場合がある。

**訪れた会場数**  
(回答数：367)

1箇所	242人	65.9%
2箇所	62人	16.9%
3箇所	37人	10.1%
4箇所以上	26人	7.1%
計	367人	

※実際に訪れた数を回答して頂いた。訪れる予定も含めて質問していただければ、回遊の様子がより正確に把握できたと思われる。

**各会場の来場者数**

新潟大学 旭町学術資料展示館	264人
砂丘館	1,247人
旧齋藤家別邸	8,605人
行形亭	208人
北方文化博物館 新潟分館	1,620人
正福寺	125人
加島屋	272人
旧小澤家住宅	2,118人
新潟市歴史博物館	3,850人
計	18,309人

**掲載記事**

- ・市報にいがた(2023年10月15日号)
- ・中央区だより(2023年10月15日号)
- ・月刊にいがた おでかけトピックス(2023年10月25日号)
- ・web日刊にいがた(2023年10月26日)
- ・市報にいがた(2023年11月19日号)
- ・新潟日報 (2023年11月16日 朝刊 21頁)



ポスター(B2)



特設webサイト

<https://www.lib.niigata-u.ac.jp/tenjikan/innovatemuseum2023/>



シンポジウム フライヤー(A4)



パンフレット(A3二つ折)



体験講座 フライヤー(A4)



コンサート フライヤー(A4)

## 謝辞

以下の関係者の方々や機関をはじめ多くの方々から多大なご教示、ご協力を賜りました。心より御礼申し上げます。(敬称略・五十音順)

麻野恵子、阿部知恵子、阿部均、行形和滋、伊藤恭子、伊野義博、井上美雪、岩田多佳子、岩間正吉、牛木辰男、江間一誓、岡逸、岡村浩、岡元正子、奥村基、小澤康太、小澤ゆい、笠原香織、加藤歩美、金安良則、神尾顕斗、倉地一則、河野良枝、小寺嘉信、後藤光晴、小林愛美、小林萌、小林祐子、坂井百合子、佐藤琴、佐藤帆乃香、澤村明、菅又淑子、鈴木恵子、高井真利子、武田蘭、田代早苗、田中綾子、田中茉莉恵、田邊幹、筒井日向、角田勝久、富樫真美、栃倉淳子、中澤資裕、中澤善紀、中野康司、中村愛海、中村里那、奈良秀樹、南澤杏菜、長谷川蘭、林奈美恵、原直史、原優月、針貝博和、平井有佳、広沢萌、藤田昌宏、本間邦大、本間佑希、松島咲月、宮川知子、宮原千恵、安永拓世、山浦健夫、山賀慶太、山本真也、横山夏子、吉原悠博、若崎敦朗

あさひまち友の会、行形亭、加島屋、旧小澤家住宅、京表具神尾萬正堂、後藤経装、正福寺(新潟市)、スタジオ・スガマタ、新潟県立近代美術館、新潟県立歴史博物館、新潟市、新潟市美術館、新潟日報社、文化庁、北方文化博物館新潟分館、ゆいぽーと(新潟市芸術創造村・国際青少年センター)

## みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト—近世から現代まで

会期	2023年10月25日(水)～11月26日(日)
会場	新潟大学旭町学術資料展示館、砂丘館(旧日本銀行新潟支店長役宅)、旧齋藤家別邸、新潟市歴史博物館(みなとびあ)、旧小澤家住宅、北方文化博物館新潟分館、正福寺、行形亭、加島屋
主催	みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト実行委員会
共催	新潟大学、新潟市
協力	砂丘館、旧齋藤家別邸、新潟市歴史博物館、旧小澤家住宅、北方文化博物館新潟分館、正福寺、行形亭、加島屋、新潟シティガイド、ゆいぽーと(新潟市芸術創造村・国際青少年センター)、新潟市美術館、西大畑旭町文化施設協議会
助成	文化庁 令和5年度 Innovate MUSEUM事業

関連イベント

- 「名作とコラボしよう！俊明さんの《龍虎図屏風》体験講座」 2023年9月23日(土・祝)13：00～15：00
- 「みなとまち新潟の歴史文化遺産—継承、公開、活用」 2023年11月11日(土)13：00～15：30
- 「ちょっとおしゃべりなコンサート—音楽ことはじめ」 2023年11月23日(木・祝)14：00～16：00
- 新潟シティガイドによるまち歩き 2023年11月19日(日)、25日(土)

## みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト実行委員会

### 中核館・事務局

新潟大学旭町学術資料展示館

### 連携館・団体

砂丘館(旧日本銀行新潟支店長役宅)

西大畑旭町文化施設協議会

新潟シティガイド

新潟市文化スポーツ部

新潟市歴史博物館

旧齋藤家別邸

### 委員

会長	丹治 嘉彦	新潟大学旭町学術資料展示館館長・新潟大学教育学部教授
副会長	大倉 宏	砂丘館(旧日本銀行新潟支店長役宅)館長・認定NPO法人新潟絵屋理事長
委員	大森 慎子	新潟市歴史博物館学芸担当次長
委員	田辺 匡史	新潟市文化スポーツ部次長・文化政策課長
委員	神田 剛	新潟シティガイド代表
委員	久保 有朋	旧齋藤家別邸学芸員・古町花街の会事務局長
委員	田中 咲子	新潟大学人文学部・教育学部教授
委員	永吉 秀司	新潟大学教育学部准教授・公益財団法人日本美術院特待

### 事務局

事務局長	平田 完	新潟大学学術情報部学術情報サービス課長
事務局員	山城 光生	新潟大学学術情報部学術情報サービス課資料公開係長
事務局員	間瀬 菜緒美	新潟大学学術情報部学術情報サービス課資料公開係
事務局員	清水 美和	新潟大学旭町学術資料展示館学芸員
事務局員	中川 則之	新潟大学旭町学術資料展示館

## みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト記録集

編集・発行 みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト実行委員会

デザイン Pデザイン研究所

撮影 奥村基・山賀慶太

印刷・製本 富士印刷株式会社

発行日 2024年2月1日

©2024 みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト実行委員会

